

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の 教育



特集

子どもと春

好評連載

『幼児の教育』  
ネット公開に寄せて3

3

新

刊

フレーベル館創立100周年記念出版

# 倉橋惣三文庫 <全10巻>

倉橋に学び、保育を極める。

日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋研究の第一人者・森上史朗の名著「子どもに生きた人・倉橋惣三」の改装版

## 倉橋惣三文庫⑨

### 倉橋惣三・その人と思想



坂元彦太郎／著

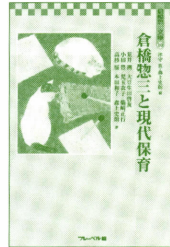
- 第一章 序奏
- 第二章 爽やかな出発
- 第三章 多彩なる開花
- 第四章 華やかなる遍歴
- 第五章 豊饒なる結実
- 第六章 暗鬱なる洞穴
- 第七章 晩年の光芒
- 第八章 終曲

10809

18×12cm 216頁 定価1,260円(税込)

## 倉橋惣三文庫⑩

### 倉橋惣三と現代保育



荒井冽・大豆生田啓友

小田豊・児玉衣子  
高杉展・本田和子  
森上史朗／著

10810

18×12cm 200頁 定価1,260円(税込)

好評  
発売中!!



### ① 幼稚園真諦

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 148頁 定価1,155円(税込)

### ② 子供讃歌

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 236頁 定価1,260円(税込)

### ③ 育ての心(上)

倉橋惣三／著

18×12cm 180頁 定価1,155円(税込)

### ④ 育ての心(下)

倉橋惣三／著 大豆生田啓友／解説

18×12cm 244頁 定価1,260円(税込)

### ⑤ 幼稚園雑草(上)

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 276頁 定価1,260円(税込)

### ⑥ 幼稚園雑草(下)

倉橋惣三／著 上垣内伸子／解説

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

### ⑦ 子どもに生きた人・

### 倉橋惣三の生涯と仕事(上)

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

### ⑧ 子どもに生きた人・

### 倉橋惣三の生涯と仕事(下)

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 204頁 定価1,260円(税込)

キンダーブックの

# フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第108巻 第3号



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第108巻 第3号

巻頭言

ある幼稚園と小学校の交流活動から学んだこと

河邊貴子

4

## もくじ

### —特集— 子どもと春

Y君のいない卒園式

江波諄子

8

わが子の春

石動瑞代

13

幼稚園の春

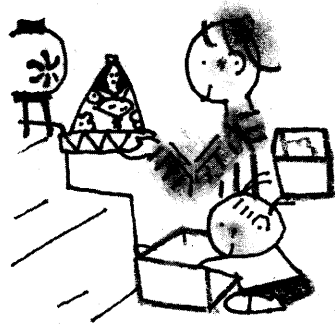
安部富士男

16

一年生に教えてもらったこと

渡辺 敏

23





園長のまなざし第3回

アットホームな保育園

高橋悦子

28

保育の中の動物(3)

ペンギンものがたり

岸井慶子

30

観察のまぐろ「子どものたわ(2)」

三歳児の汽車遊びに見る、人とかかわりの育ち

砂上史子

34

「幼児の教育」をネット公開に寄せて(3)

「幼児の教育」をネットで読む

キーワード「遊び」から出合った記事

横井菘子

40

報告

韓国の障害児保育について

金 允貞

46

保育の現場から

「みんなの中の私」といふこと

伊集院理子

52

お茶の水女子大学「幼保大」連携保育研究の試み(27)

アメリカ合衆国の保育事情・保育思想(2)

塩崎美穂

58





## 巻頭言

# ある幼稚園と小学校の 交流活動から学んだこと

河邊貴子

東京都心に立地するA幼稚園は小学校に併設されており、日ごろから幼小の交流が盛んです。その日は、小学五年生による幼稚園の園児たちへの絵本の読み聞かせ交流の二回目でした。五年生が絵本を選び、パートナーとしてあらかじめ決まっている幼児と共に二十分間を過ごします。

五年生の中田君は活動の前に「僕には妹がいて、いつも親に本を読んでもらっているから、それをまねてうまくやりたいです」と決意を書いていました。中田君のパートナーは四歳児のアヤちゃんです。初め、二人は緊張気味に少し距離をとって向き合っていました。ところが次第に近づき始め、絵本半ばではほとんど膝頭がくっつくくらいに接近しました。そして、絵本の場面が「猟師が鳥をいけどる」というところになると、中田君は突然絵本から顔を上げて「いけどるってわかる？」とアヤちゃん



に聞いていました。自分で読みながら「幼児はこの言葉を理解できるのだろうか」と考えたのでしよう。

アヤちゃんからは「わかるよ。だって私、漢字が書けるもん」と、少しビントが外れた無邪気な答え。中田君は少しびびくりした様子でしたが、すぐに表情を崩してアヤちゃんの顔をのぞき込み、ゆつたりとした口調で「すごいねえ」と受け止めたのです。中田君は幼児を慈しみ、「幼児の理解」を理解して行動しました。「親をまねてうまくやりたい」という決意を実現した姿でした。

中田君のペアだけではありません。相手の様子に合わせたり、受け止めたりする姿がそこに見られた交流活動となりました。「幼稚園の子どもを楽ませたい」と書いた小林さんは、モモちゃんが絵本に描かれたごちそうを食べるまねをする間中、じっとページを開いて待っていました。「読んで楽しくなるような絵本の読み方をする」と書いた石崎君は、ハルト君が絵を指さしながら確認するようにつぶやいた「入ってるね」という言葉を聞き逃さず、「うん、入っているね」と同じ言葉を返していました。「楽しませたい」「優しくしたい」というような抽象的な希望や心情を、どう表したら相手に伝えられるか。五年生は状況の中で、見事にそれぞれのやり方をもって具体的言動へと変換しました。

第一回目の読み聞かせ活動のときには、園児の反応などはお構いなしに読み進めていた児童が多かったのに、相手の状況に合わせて「振る舞い」を修正した五年生と、



五年生が来るのを楽しみに待ち、自分の思うことを状況に応じて伸びやかに表現していた幼児です。私はこのA幼稚園・小学校の幼小連携研究に参加するたびに、双方の学びは交流の結果にあるのではなく、交流そのものの状況の中にあるという実感を深めています。

子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方として、「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」（平成十七年中央教育審議会答申）が打ち出されて以降、幼小連携の研究が国公立幼・小を中心に全国で行われています。幼稚園から小学校へと段差のないカリキュラムの作成を目指している研究もありますし、指導方法の連続性についての研究もあります。これらの研究を概観するとき、明らかにすべき大きな問題があることに気づかれます。それは「学びとは何か」ということです。私はある会議で、小学校の先生から「これからは幼小の学びの連続性が重要だから、幼稚園卒園時には四十五分間座れるように教育してほしい」と言われて驚いたことがあります。「学び」をどうとらえるかによって「連続性」のとらえも変わり、その具現化を目指す方策も変わることは明らかです。幼児教育は小学校教育の基盤としてのみならず、生涯にわたって必要な基盤を形成する教育です。五歳児から小学校一年生への接続というように「連続性」を矮小化してしまうと、このような幼児教育への表層的な要望が生まれてしまうのです。





私には「学びとは何か」という教育学の大命題に明快に答えることはできません。

しかし、A幼稚園と小学校の連携研究から気づかされるのは、そのことを考えるならば、状況の中で彼らの振る舞いがどう変化し決定されていくかを、子どもたちの言動の中からできるだけいねいに拾い上げることが重要だということです。

「小学生になる」、これは幼児自身が自覚する人生初めての「ハレ」ではないでしょうか。幼児にとつてそれは「昨日」の続きの「明日」ではなく、飛躍の「節目」なのです。もちろん、幼小間に乗り越えられないような段差があり、それに足を取られて育ちが後退するような教育は認められません。しかし、人はそこに「異なり」が横たわるからこそ、大きく飛躍できる場合もあります。幼児と小学生とは思考のプロセスや理解の仕方に「異なり」があり、教育の方法は共通ではありません。私たちに期待されているのは、段差を全て均してしまうことではなく、「異なり」を積極的に取り込み、そこに自分の居場所を見つける力を身に付けられるようにすることではないかと考えます。小学校側は幼児教育で育ってきた力を信じて教育を展開することです。

全国の年長児が胸いっぱい希望をつめ込んだ三月となりました。子どもたちは幼稚園（あるいは保育所）の生活を充分に楽しんで修了を迎えていることでしょう。幼児教育に携わる私たちにとっては、新幼稚園教育要領完全実施という節目を迎えます。幼児期の教育が、幼児にふさわしい生活の中で十全に展開されるよう、英知を合わせるときです。

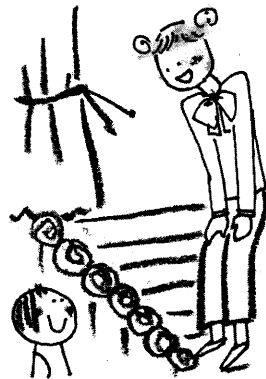
（聖心女子大学）

特集

子どもと春

Y君のいない卒園式

江波 諄子



式を前にして

今年の卒園式は、二歳からずっと成長を見てきたY君がいません。

週に何度となくキャンパス内の幼稚園へ行く私は、昨年夏休み明け、彼が引越すことになったと母親から知らされました。その日、園庭で彼に近づくと、ブルーのカラー帽子を半分脱ぎ、髪の毛を切ったと伝えてきました。珍しく二分刈りの頭は、毛並みに沿って触ると滑らかで、私は「とってもいい気持ちね」と

言ったように思います。彼の涼しそうな目、そして、幾分元氣のないほほ笑みが印象的な無言の別れの場面でした。

Y君は、この園を去ることをどんなふうを受け止めているのだろうか？ けれど、引越しについて彼と直接話す勇気がわいてきませんでした。

ある日、母親の様子を聞いてみました。突然の転動で、今は二歳年上の小学生の兄のK君の転校のことで頭がいっぱいと言っていました。私は、ますますY君の心の中が気になりました。九月末、幼稚園に行

くとY君はもういませんでした。最後の日は、お友達みんながお別れを残念がったと、担任が教えてくれました。

その日の夕方、大学の仕事を終え、途中のスーパーに立ち寄った私は、仕事から気持ちを切り替え、野菜売り場で立ち止まりました。すると突然、涙があふれてきてY君のことを思い出してしまいました。この年になって、担任でもない自分が、不覚にもこんなことでどうして涙があふれてしまうのだろうと情けなくなってきました。

### 四年間の思い出

Y君は、筆者が大学の授業として実践している未就園児のための親子プログラム「まつの子ぐみ」に二歳から通っていました。兄がいたため幼稚園には慣れており、あちらこちらのコーナーを動き回り、元氣よく遊びました。

その中に、小ビンにろうそくを入れ、火をつけて部

屋を飾る活動がありました。数個の厚めのガラスの容器の中では、小さな炎がゆらゆらとしていました。Y君はそれを見つけると、どのコーナーにいても火を消しに来たのです。「ふーっ」と消すと、また別の遊びに行ってしまう。マッチをつけるのが困難な学生がようやくまた火をつけると、再びやってきて同じことを繰り返すのでした。そばで見えていた母親が、申し訳なさそうに「誕生日のケーキのろうそくは消すが」これは消さなくていいの」と言っても止めませんでした。後々、このことはとても楽しい思い出となりました。年長になった四月のある日の午後、「まつの子ぐみ」の部屋に預かり保育のY君がやってきました。私は、新しい壁面造形を学生と考えているところでした。「えなみせんせい、ほく、お手伝いします」と言う彼の言葉と少し大人っぽい表情に、私は一瞬戸惑いました。私は以前のかわいい彼ではなく、今の彼と付き合わなければと姿勢を正し、「じゃあ松葉のモールをはがしてください」と言いました。Y君は、すっかり

二年前に卒園した兄のK君のように成長していました。

二年前の卒園式の日、どの子も式の練習をよくやり、当日は時に愛らしく、時に覚えたとおりに真剣にしっかりと行動できました。その中でも背の高いK君はひととき大きな声で、一つひとつの行動もメリハリをつけ、あまりにしっかりとできたので、参会者の誰もがほほ笑ましくも驚嘆したのでした。これから小学校という未知の世界へ強靱な意志で向かおうとしているのか、いや、幸せに過ごした幼児期の最後の証としてか、力強い成長の姿を私たちに印象的に見せてくれたのでした。そのK君にY君はすっかり似てきたのでした。

### 式に臨んで

今年の卒園式を私は複雑な気持ちで迎えました。あの日のK君のように、Y君の姿をもはや見ることができないからでした。たまたまお祝いの言葉を述べることになっていましたが、挨拶の内容は文字では準備せず、心の中に子どもたちとの想い出を何度も呼び起こ

して臨みました。壇上に立った私は、子どもたちを見渡しました。Y君はやはりいませんでした。でもたくさんのお想い出深い、特に二歳児から知っている子どもたちの顔が見えました。

子どもたちは、壇上の私が「おめでとうございませ」と言うのと、大きな声で一斉に「あ・り・が・と・う・ご・ざ・い・ま・す」と言いました。私はマイクに口が接触するくらい近づけ、一人ひとりの子どもと話すように小声で語りかけ始めました。すると子どもたちは、あのしっかりとした返答ではなく、それぞれに「うん」というようにうなずいたり、「ふーん」というような表情をしたり、時には、私の言葉に対して自発的な言葉を返してくれました。Y君がいたら、もっと子どもたちと会話を交わす式になっていたことでしょう。それでも、どの子も吸い込まれるように話の内容に入ってきてくれました。あの子もいる。この子もいる。私はY君のことはもう考えていませんでした。こんなにたくさんの子が、圧倒されるような命の

◎集◎ 子どもと春

エネルギーを私たちに放っているのです。子どもと保護者と保育者が、共に一つの喜びを分かち合う卒園式になったような気がしました。

別れの意味

それにしても、Y君は五百キロメートル離れたかの地の幼稚園に数か月通い、どんな卒園式を迎えたのでしょうか？ 何とか穏やかな卒園だったのでしょうか？ 想いは今も続き、答えは空白のままです。

どうして私は、Y君と別れのあいさつを交わさなかったのでしょうか？ 直接の担当者ではないからなのでしょ  
うか？ 大人の過重な想いで、小さな子どもにも重荷を負わせたくなかったからなのでしょうか？ それとも、別れはそう簡単なことではないから、そのよりよき方法を見つけれなかったからなのでしょうか？

子ども時代の別れの場面の回想記録（拙著『キーウェイデインの回想』（江波諄子／編著 新風舎 二〇〇五年）が手元にあるので読み返してみましよう。

引っ越し

一人で

三輪車に乗っていると

「今日 引っ越しじゃあないの？」

と仲良しの友達に言われた

突然 大きなトラックがきて

次々に荷物を積んでいる

私は異様な気持ちになった

お隣の大ちゃんは

おかあさんが挨拶にいつでも

お家の中からでてこない

私達のがのったトラックが

走り出したとき

私の頭の中は

悲しみと戸惑いで混乱していた

## 先生のような先生になろう

卒園式の日

オルガンを弾いていた先生のお顔が

涙で ぐしゃぐしゃになった

先生が泣いている

お別れをする門の所に

先生は なかなか出て来ないので

私は心配になった

やっと出てきた時

先生のお顔は

さつきほどぐしゃぐしゃじゃあなかつたけれど

大きな涙が落ちてきた

なぜだか分からないけれど

(私も先生のような先生になろう！)

と思った

別れはたんに「悲しい」というよりも、これまでに味わったことのない複雑で不思議な感情経験になるようです。子ども時代の回想を集めた筆者の資料によると、そのときの子ども戸惑いが一つのシーン(場面)として語られています。母親が次子出産のため入院するとき、入園当初の親との別れ、祖父母・身近な人々・動物などとの別れが主たる内容です。

一方、子どもの生活空間に時折見え隠れする人、たとえば近所の人、親戚の人、時どきやってくる人(筆者はこのケース)との出会いや別れの感情は、生々しい感情は伴わないが、後に印象的に記憶の底に残るということもあります。Y君には愛情深い両親、大好きな園長先生や優しい担任の先生、そして彼を慕う大勢のお友達がいることを知っていた私は、いわば窓の外から彼との別れの場面を見つめていたのでしょうか？ それにしても、温かい春の息吹が、別れの想いに駆られる私たちを優しく包んでくれるのは幸いなことです。

(常磐大学 人間科学部 教育学科)

## 特集

### 子どもと春

## わが子の春

石動瑞代

### 春の訪れ

厳しい冬の寒さも緩み、暖かな日差しと柔らかな風を日増しに感じる三月。子どもの心には、新しい学年への期待がぐんぐんと高まっています。

仕事忙しい年度末の時期。親のほうは目先の時間に心を奪われて穏やかでないことが多いのですが、その傍らで「○○組さんになったらね……」と、子どもは新しい生活を思い描きながら話します。

その明るい表情と瞳の輝きに触れて、親である私もふと時の流れを感じ、ようやく周囲の春の空気に気づくようになります。子どもが保育園という社会に参加

するようになってから、私は「春の訪れ」を、「子どもの新しい生活への期待に満ちた姿」から感じるようになりました。

### 一つ大きくなること

子どもは「大きくなる」という実感を、一体どんな時にもつのでしょうか？ 誕生日を迎えた時は、一昨年が増えたことを喜びながらも、案外大きくなったという実感をもっていないように見えます。むしろ、「自転車に乗れるようになった」「跳び箱が跳べた」など、今までできなかったことができるようになった時、子どもは「大きくなった自分」を感じているよう

に思いますが、それは一瞬の喜びでもあります。

保育所という自分なりの社会生活の場を獲得した子どもにとって、クラスが変わるといことは「大きくなる」ことを充分に実感できる機会であると思いません。何しろ、かすかな春の訪れを感ずるや否や、新しいクラスでの生活や役割を思い巡らし始め、約一か月以上もかけてかみしめていくのです。

時には、周囲の大人に「そんなことしていたら○○組さんになれないよ」などと巧みに利用されて、不安や緊張を感じることもあるけれど、期待は着実に膨らんでいきます。園での生活経験の記憶を総動員しながら「○○組さんになった自分」を思い描き、それを実現したいと思うエネルギーは、次第に凝縮されて子どもの中に満ちていきます。このころの子どもの姿は本当に生き活きとしていて、つい「本当に○○組さんになれるかな？」などという不用意な言葉を投げ掛けそうになる私に、その言葉を飲み込ませてくれます。子どもにとっては、今が「一つ大きくなる」自分を楽し

む大切な時間なのだと感じつかされるのです。

### 期待から不安そして現実へ

四月。新しいクラスでの生活が始まる日。これまでの期待がぱっと花開く時がやってきます。この一日の始まりは、本当にエネルギーに満ちていると感じます。それは、つぼみが開花するような華やかな感じもありますが、どちらかといえば、今まで小さな種の中に閉じこもっていた力が外に放たれ、土から芽が出た瞬間のポコッという感じでもあります。大きなエネルギーが放たれて外に現れた姿は、実際にはまだ弱々しく、初めて出合う風に揺らいでいます。子どももまた、不安に揺らぎながら現実の生活をスタートさせていくとさだからでしょう。

昨年四月、とうとうわが子も年長さんになりました。保育所六年目となるわが子は、「年長さん」が活躍する姿をずっと見て憧れてきたため、その喜びも大きかったようです。最初の登園日にはネクタイを着け



特 集 子 ども と 春

て登園しました。彼は「ネクタイ」が年長さんになったシンボルだと考えたらしく、自分から着けたいと言いだしたのです。その日の朝の晴れやかな表情は、今でもはつきりと思いつき出すことができます。

あれから一年。年長さんとしての役割や行事などを体験したけれど、その内容は思い描いていた生活とは少し違っていました。異年齢児クラスでは、なかなかリーダーシップを発揮できず苦労しました。運動会の鼓笛など年長だけの活動では、憧れていた役に就けず、違う役割を担うことにもなりました。年長だったらできると思った遊びや運動も、自分にはどうしてできないものがありました。もちろん期待以上の楽しい生活もあったけれど、期待どおりにはいかなことをたくさん経験した一年でした。がっかりした表情、悔しい表情を見せるわが子に、私はよいかかわり方を見いだせず、ただ見守るしかできませんでした。それでもわが子のほうは、少しずつ自分の思いを修正して現実の生活を楽しんでいました。子どもにとっ

ては、保育園という社会の中で、友達のを認め、自分の姿を見つめながら自分らしい生活の仕方をつくりあげていく一年間だったように思います。そしてそのプロセスを支えたのは、やはり三月から四月にかけて高まった「生活の主体者」としての意欲だったと感じるのです。

「春」という自然がもたらす「伸長」のエネルギーや明るさは、子どもの一年間の生活を育むに充分な力を与えてくれるようです。

「むかし」の話

わが子はいつのころから「むかし」という言葉をよく使うようになりました。「むかし、ぼくが好きだったね」「むかし、ママが言ってたよね」などと表現される「むかし」は、ほんの数日前のことでも多かったのですが、さすがに六歳にもなるとおよそ一年以上は前の出来事を意味するようになってきました。そして「むかし」の代わりに登場したのは、「〇〇組の時」で

した。時折、大人がわが子の思い出話をする、「それははくが何組の時の話なの？」と聞いてきます。そして「何歳？」と続けるのです。一歳前から保育園に通うわが子の場合、過去の話のほとんどは「〇〇組の時」で説明できるからかもしれません。けれど、自分のことを振り返る時に使う「〇〇組の時」は、彼が、春に新しく始められる園生活を一つの単位として時の流れを整理するようになったということでもあるように思います。やはり「春」というのは、子どもにとって特有の意味や深さをもつ「時」なのだと思います。

もちろん親である私にとっても、「春」はわが子の成長を立ち止まって確認し、改めて感謝と喜びをかみしめる特別な時間です。日ごろは目の前のわが子の姿にのみ心配したり焦ったりする私も、進級の前後には神妙にこれまでの姿を振りかえり、成長の喜びを感じることができます。残念ながら進級後の姿については、期待よりも心配が先立ってしまうのですが、それでも何となくワクワクした気分にもなります。この時

間は、親として頑張った一年を自分なりに認める時でもあるように思います。

### 保育園での時間

四月からは、わが子もいよいよ小学生。わが子は「〇〇組の時間」ではなくて「保育園での時間」として、むかしの時間を一括りに整理しようとしています。親である私も、これまでの時間を整理していかなければならないようです。

私は保育園での時間をどうしても「親からの分離」という視点でとらえがちでした。まだ歩くこともできないわが子を初めて保育園に託した最初の春、その複雑な心境がずっと心の奥底にうずまいていたからです。

さらに二歳のころ、寝かしつけに読んで『よるくま』（酒井駒子・作、偕成社）の絵本で見せた子ども  
の涙を忘れることができませんでした。『よるくま』は、寝ている間になくなったおかあさんくまを捜すこぐまが登場する話なのですが、わが子は固い表情で



絵本を見つめ、二人が再会する場面でぼろっと涙を落  
としました。その姿は、幼い子どもに不安な時を過  
させている現実を示すものとして、私の心に深く刻み  
込まれています。結局私は、最後まで「遅お迎え」を  
待っていたわが子に、不安を解消してやることはでき  
なかつたように思います。

しかし今振り返れば、彼は確実に成長し、保育園で  
の時間の中に、しっかりと自分の生活を築いてしまし  
た。保育園での時間は、母親からの分離の時間ではな  
く、子ども自身の時間となっていたことを改めて感  
じ、それを支えてくださった先生方やお友達に感謝の

気持ちでいっぱいです。

そして、一緒に子育てをしてきた夫、さまざま支  
援をしてくれた両親たちのおかげだとしみじみと感じ  
ます。新しい春を前に、私も親として、何とか一つの  
ステージを終えることができましたようです。

### 新しい生活に向けて

わが子は今、小学生の自分に期待を膨らませていま  
す。転居によって未知のことばかりの小学校生活を強  
いることになり、不安も大きいだろうと思うのです  
が、彼なりにしっかりと前を見据えています。

新しい生活を歩みだそうとするわが子は、これまで  
以上にエネルギーに満ちているように見えます。子ど  
もの時間に、親である私が少し離れてついでいく。私  
はそんな距離のとり方を考えながら、いよいよ一年で  
最も凝縮された時を迎えようとしています。そしてま  
た、親としての新しいステージが始まります。

# 特集

## 子どもと春

### 幼稚園の春

#### 園庭は癒しの場

私たちは、幼稚園を地域の共育ちの場にするために園庭を開放しています。自然豊かな園庭に集うことが、人と交わる心地よさを味わう「ひととき」となって、子どもも大人も、そこに故郷を感じるようになっていっています。その前提として、園庭が「癒しの場」になっていることが重要です。私はその視点から、園庭で過ごす子ども・大人たちの姿をつづって、そこから課題を読み取り、この三十年間、園庭の環境づくりを活かすように努力してきました。理事長・園長、教職員、父母の有志、それぞれの個性で無理せず

安部 富士男



に持続する形で、心に残った情景を記録したり話し合ったりすることが大切と考えています。

春休みのある日のことです。午前十一時ごろ、園庭から聞こえてくる子どもの声に誘われて書齋を出ると、花びらが風に乗って空に舞っていました。

空に舞う花それぞれの韻をもち

二十組ほどの親子が仲間と連れ立って園庭に遊びに来ていました。満開の桜の下にゴザを敷き、親たちが手づくりの料理を分け合っていました。

私を見かけ、ゴザから出て両手でバランスを取り、素足で私に向かって歩いてくる乳児、その姿をほほ笑

んで見守る親。私は幸福感に満たされていきます。

芳子が目の前に降ってきた花びらをつまんで、ゴザから飛び出し、私に駆け寄って見せてくれました。

稚児ちごつまむ花なに幽かすかに空の藍

ひとひらの花弁はなびらに映うつえる空深そらし

「きれいだね」と芳子を抱きあげると、耳たぶにかすかに花の香りを感じました。

稚児抱かかくや耳みみ朶たに幽かすかに花薫かほる

弁当を食べ終わった子どもたちが花吹雪に誘われ、ゴザを跳び出し、かごめかごめを始めました。

風立つや花はなに身を寄せ稚児ちごら舞う

花舞はなうやかごめかごめの子ら包かみ

梅の根元では、この四月に年長組に進級する子どもたちの『家族ごっこ』が続いていました。

ままママごとの母はサラダに花齋はな

稚児ちごの掌ての齋はな包かみて日ひざし舞う

ままママごとの菜花なご飯いに地ちの香り

傍らのゴザの上で、二歳の弟が眠っていました。

ままママごとの疲れつかれ寝ねし子の掌てに齋はな

牧場から山羊の鳴き声が聞こえると、「餌をくれて鳴いている」と、清が牧場の丘に駆け上っていきました。三歳の空そらも、おぼつかない足取りで後を追っています。私も牧場に向かいました。

空は、牧場に駆け寄ると、清からもらった草を山羊にあげていました。私が近づくと「僕、餌、あげるの、上手でしょう」と胸を張っています。空は、園庭の片隅にある畑に駆け行って齋はなを摘んで戻ってきました。山羊が草をおいしそうに食べると、最初緊張していた表情もくつろいできて、空の唇が山羊の口の動きに合わせかすかに動いています。清は柵を登って越

え、牧場に入つて餌をあげています。山羊も安心しきつた雰囲気です、山羊係でいつも世話してくれる清に身を寄せ、餌を食べています。

### 山羊愛し稚児に身を寄せ齋食む

Schoolの語源は「癒される居場所があつて、興味・関心・課題を論議するところ」。幼稚園も学校もその視点から園庭の環境を工夫することが大切です。

自然の四季に寄り添い、遊び・仕事のある生活を楽しんでいゝ子どもたちの姿に癒されて、私は幼稚園教育経営の危機を越えてきました。その背後に、時には「いざかい」しても幼稚園の教育方針を理解し、基本的には支え合つて生活している母親たちがいることを実感しています。

### 待つ力は見通す力と織りなして

春休みが終わつて入園式。式の翌日、喜びを全身に登園してきた孝は、母親が帰ろうとすると「お母さん

も一緒」と泣き始めました。それから毎日、門の前で大泣きし、担任を困らせていました。十日目、相変わらず泣いている孝の泣き顔もかわいいと感じて私が寄つて行くと、孝と目が合いました。

「園長先生におんぶする？」と声をかけると、孝はうなずきます。近寄つて背を向けると、背中に乗つてきました。私が両手を後ろに回してお尻を支えると、また「お母さんと一緒がいい」と泣き始めました。しばらくして突然泣き止みました。孝のおえつを背中に感じながら『どうしたのかな』と自問した時、孝が、「大変です。ここ、毛がありません」と私の頭頂部を指でつつきます。孝はいつも下から私を見ているので、私の髪はふさふさしています。ところが上から見ると頭頂部がはげていて驚き、一瞬泣き止みました。「園長先生は年寄りだからはげているの。孝君の大好きなお母さんのお土産、探そうか」と話すと、脇で孝と私のやりとりを見ていてほほ笑んでいた担任が、ポケットからビニール袋を出して孝に渡してくれました。

「森先生は優しい。お土産を入れる袋を孝君にくれた」と私が言うと、孝は目で同意していました。

雑木林の丘のスロープを上り尾根に出ると、山桜、染井吉野、大島桜、いろいろな桜の実が落ちていました。「お母さんのお土産、何にしようか」と孝を背から降ろすと、私は実を拾い始めました。「あっ！赤い実や青い実、黄色い実、きれいだ。」と独り言を言うと、孝もセッセと拾ってはビニール袋に入れ始めました。しばらくして「お母さん、迎えにくる」と私を見上げました。「お土産集めて、山羊さん、ウサギさんに草をあげて、お部屋に行くと、先生が紙芝居を読んでくれる。紙芝居の後、おやつを食べているとお迎えにくるよ」と応えました。孝は安心して、また、桜の実を拾い始めました。

年長児が「きれいな花咲いてるよ、来てごらん」と誘いに来ました。「僕もおいで」と孝の手をひいてくれます。春蘭が数輪、咲いていました。四月、年長児が新入園児に心配りしている姿に心とみます。

### 春蘭の花弁に鳥の影走る

孝が、左手に袋をしつかり持って右手で草を摘んで牧場に行くと、子山羊が柵に駆け寄ってきました。

### 東風吹くや子山羊を子らに吹き寄せて

孝は、山羊に餌をあげたり、紙芝居を読んでもらうことをイメージし、母親を待ちました。見通す力と待つ力は紡ぎ合って豊かになると考えています。

### 春ならではの発見と感動を

森を見回って草のトンネルを抜けると、畑の奥に菜の花が咲いていました。祐司と太郎が肩を並べて見つけていました。私に気づくと「ここを吹く風は黄色いよ」と感動しています。森を吹き抜けてくるさわやかな風に包まれて「風に色があるなんて知らなかった」と私は応えました。太郎が「よい匂いもする」とつぶやくと、祐司は菜の花から飛び立つ蜂を追って視線を

動かしています。「わかった。目に見えない蜂蜜が  
いっぱい飛んでいるからよい匂いがするんだ」と私を  
見上げました。祐司の母親は料理づくりが得意で、蜂  
蜜たっぷりのケーキをいただいたことがあります。祐  
司の家の台所には、蜂の絵のラベルを貼った瓶がある  
のかもしれませんが。そんな生活を背景に「よい匂いも  
する」と言う仲間の発見に触れて考えたのでしょうか。

私たちは、四季の美しさや変化を体で感じ、考える  
生活を大切に行っています。感性と知性の発達は織りな  
していることを子どもの言葉から学んでいます。

菜の花を播らせ舞いゆく風は黄色

### 自然を天然の保育室として

大正から昭和にかけて、子ども主体の保育・教育の  
創造を目指し、実践に即した研究を通して日本の保育  
の土台を築いた及川平治、倉橋惣三、橋詰良一らは、  
異口同音に「大地を床、大空を天井、緑なす木立を壁

とした天然の保育室こそ最高の学びの場」と主張して  
いました。私たちは、四季に寄り添い、自然の恵みを  
生活に取り入れ、豊かな遊び、仕事のある保育の中  
で、実体験を言葉などで表現することを大切に、感  
性・感情・意欲の発達に知性の育ちをつなげようと努  
力しています。

子山羊追うや子らに木の芽の天光る

子ら登る桑木芽吹きて空やさし

蝶追いゆく子らに優しき土手の空

(神奈川県横浜市 安部幼稚園 園長)

### 引用文献

\*スタンダード英語語源辞典 大修館書店、School's Leisureの項

### 参考文献

安部富士男／著 『遊びと労働を生かす保育』 国土社、

一九八三年、第二章

安部富士男／著 『人との交わりを支えに生まれた幼児教育』

新読書社、二〇〇五年、第五章



# 特集

## 子どもと春

### 一年生に教えてもらったこと

渡辺 敏

私は今までに二度、小学校一年生を担当しました。そのどちらも忘れられない思い出ですが、四月当初に担任になった時の気持ちは、かなり違っていました。

#### 一度目の春

教師十年目、初めて一年生の担任になった時私は子どもたちを早く立派な小学生にしようと燃えていました。当時、勤務校では幼稚園と小学校のなめらかな接続の研究を始めたばかりでした。自分の中では、園児たちを早く小学校に慣れさせ、一人前の小学生にしたという思いでいっぱいでした。

#### 特集 子どもと春

入学した直後の四月の末に算数の研究授業をしまし

た。「接続期を設けて幼稚園の学びと小学校の学びをなめらかに」と研究は進んでいたのですが、私は「子どもたちは早く算数を学びたがっているじゃないか。きつと入学したての一年生でもできる算数の授業があるはずだ」と考えて、色板を使った形作りの授業をしたのです。

授業後の話し合いでは「この時期に算数の内容は早すぎるのではないか」という意見が出ました。「研究に逆行している！」とも言われました。それでも自分の中では「このように教師が引っ張っていけば早く力が付き、学力も伸びるはずだ」という思いをもっていました。

## トップダウンの学力観

今思えば、教師の思いのみで一年生を鍛えていこうとしていたのです。教師からトップダウンで教えれば力が付くと思っていました。この時の頭の中には子どもの実態は不在でした。

このような気持ちで授業をする中で、何度か迷ったことがあります。休み時間にはあれほど元気な顔を見せる子どもが、授業になると元気がなくなってしまうのです。何か違うのだなという思いをもちながらも、よい手だてを打つことができずに四月の接続期は終わりました。

## 幼稚園の先生との教材開発

研究が進む中で、幼稚園の先生と一年生入学時の学習内容を協働で考えられないか、という案が出されました。たまたま私が担当となったので、「ジャガイモ掘り」を使って学習ができないか構想を練りました。

幼稚園で

もジャガイ

モ掘りは経

験済みの

で、その活

動の中で見

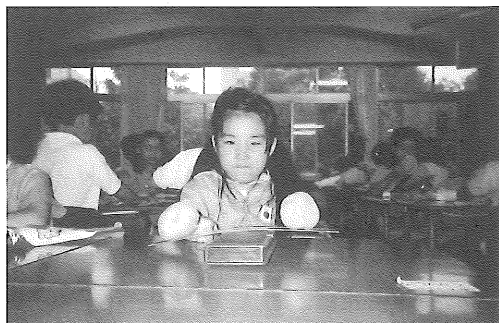
られる園児

の姿を幼稚

園の先生に

話してもら

いました。



▲ジャガイモの重さ比べ

・パーティーでジャガイモを、みんなに分ける活動はしている。

・見た目でジャガイモの大きさは比べている。

このような実態を聞いて、「形で大きさを考えているのなら、実際の重さ比べをしてみよう」と考え、重

さの直接比較の学習をすることにしました。子どもたちに見た目は同じくらしいジャガイモを提示し、「どちらの方が重いと思う？」と問い、学習をスタートしました。

比べ方は、子どもたちからアイデアを募りました。

「定規の端と端に乗せてシーソーみたいにして比べる」「転がして早さで比べる」「袋に入れて、手首にしたり、重い方が手首が赤くなる」

子どもたちの生活に根ざしたアイデアは素晴らしい方法ばかりでした。子どもたちはいろいろな方法に積極的に取り組み、いい学びができました。「あっ！一年生の生活と学びをつなげてあげれば、こんなに活き活きと学ぶんだな」

この実践が、その後の学習を計画する際にも大変参考になりました。

## 二度目の春

初めて受けもった一年生を三年生まで担任し、その

後再び一年生の担任になりました。一度目と大きく違ったことは、幼稚園との研究を積み重ねる中で、園児の生活を見る機会が増え、実態がかなり理解できたこと、また園の先生とも園児の学びや生活について語る機会が増えたことです。

入学したての子どもたちは、大きな不安を抱えています。教室に行けばみんなきちんとして椅子に座って、先生が来るのを待っています。幼稚園のころは、朝、思いの遊びをしていたのに、これは大きなギャップです。また、知っている友達がいなくても不安の要素です。仲良しができ、その子と遊ぶ休み時間があるだけで安心した学校生活が送れるものです。私はこの不安が無くなるように三つのことに取り組みました。

- ・ 幼稚園時代に楽しんでいたことを取り入れる。
- ・ 隣の友達との交流をたくさん設定する。
- ・ 四人組のファミリーでスピーチを取り入れる。

一点目の「幼稚園時代楽しんでいたこと」で考えて取り組んだのは、「読み聞かせ」と「お絵かき」の間でした。毎朝、黒板の前に全員を集めて座らせ、ゆっくり絵本を読み聞かせます。終わると今日の予定などを話し合います。黒板の前は大変小さい空間ですが、入学したての子どもたちが話を聞くにはちょうどいいサイズではないかと思うのです。各自が椅子に座っていると広すぎて一人ひとりの耳には届いていないことが多いのではないかと思います。

ほかに、お絵かきの時間をこまめに取り入れられました。子どもたちはこの時間が大好きで、夢中になって取り組んでいました。この「楽しい」夢中になれる「時間を小学校生活の中にいかに散りばめていけるかがとても大切だと思うのです。

二点目の隣の友達との交流は、さまざまな場面で取り入れられました。「国語の教科書を一文ずつ順番に読む」「算数の問題の答え合わせをする」など。さまざまな学習場面に取り入れることで自然な会話が生まれ

るようになり、緊張した顔が笑顔になっていきました。

三点目はファミリーのスピーチです。私の勤務校では各学年いろいろな形で子どもたちにスピーチをさせています。一年生の入学時は目と目が向き合う、いろいろなことがすぐに聞ける四人組がいいのではないかと考えて取り組みました。子どもたちは顔を突き合せ、思い思いの話を楽しんでいました。

この時間以外でもこのファミリーは昼食を一緒に食べたり、校外学習などでは一緒に行動するグループだったりで自然と仲良くなっていきました。

## 二度目の一年生は

### トップダウンからボトムアップ

この年の十月に公開研究会があり、一年生の担任は接続期の研究について提案をしました。その会で次のように聞かれました。

「接続期の学習を、あなたはどのように構築しているのですか?」。私は「頭の中で、『これはきつと子ども

たちが熱中するな』、「これはあまりうまいかないな」という暗算をしながら取り組んでいる」と答えました。

すると研究にいつも助言をしてくださっていた園長先生から、「その暗算の中身をもっと詳しく教えてほしい」と聞かれました。私はしばらく考えて「小学校の各学習のねらいと、子どもたちが熱中することが予想される活動形態を頭の中でミックスして計画している」と答えました。この質問があるまで、あまり理論的に考えていなかっただけに、頭の中がすっきりしました。

このほかに、いつも助言をいただいている大学の先生からは「渡辺先生、授業が変わりましたね。いい意味で迷っている」と言われました。子どもに寄り添い、学習を考えていく姿を見てもらえたのではないかと思います。

一度目の一年生ではトップダウンだった気持ちが、二回目の一年生ではボトムアップに変わっていました。

## 終 わ り に

二度目の一年生を担任した四月の接続期に、「幼稚園探検」をしました。子どもたちは、昔遊んだ遊具などで楽しい時間を過ごしました。保健室で本を読むことが好きだった子は、全く同じ時間を再現していました。ある女の子は、廊下に大の字になって寝ていました。「何が見えるの?」と聞くと、「懐かしい。こうやって寝るのが大好きだったの」と、とても満足そうでした。休み時間遊んだまま帰ってこなかったり、校外学習に出ると迷子になったりと心配していた子だったので、幼稚園時代の姿に触れて納得。「幼稚園時代と変わっていないんだな。むしろ小学校で頑張っているじゃないか」。そう思うと、私もすっかり気持ちが楽になりました。

園児時代の過去の生活に思いをはせ、そこから一年生の生活をつくっていく。その大切さを実感した時間でした。

(お茶の水女子大学附属小学校)

# 園長のまなざし

## 第3回

### アットホームな保育園

高橋悦子

保育園の朝です。

七時三十分の開園と同時に、「おはようございます」と、Kちゃん家族が元気な声を響かせて登園してきました。その声で乳児クラスの保育室にいた私は、廊下に顔を出して「おはよう。今日はみんなと一緒にいいね」と、お兄ちゃんのKちゃんと妹のMちゃんに声をかけます。「うん」と三歳のMちゃん。

「今日はママの迎え？」「ママはお仕事で遅くなる日だから、バーバの迎え」「えー、ママがいいな」「ママは明日迎えに来れるからね、今日はバーバね」「うん、わかった」

二人の会話を聞いて、私を含めお兄ちゃんも納得しました。私は家族の後ろ姿を見送りながら部屋に入ります。すると、KちゃんとMちゃんと幼児クラスの早番のS先生とのやりとりが聞こえてきました。

「S先生、おはようー」「今日の早番は、S先生であつたりー」「どうしてわかつた？」「だってS先生の



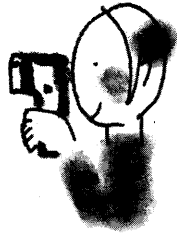
赤い自転車があったから」「今日の迎えはバーバだよ」「わかりました」

S先生と二人の会話は明るく弾んでいました。

朝の支度を、お父さん、お母さんと一緒に手際よく済ませた子どもたちは、玄関先まで両親を見送りに来て、お父さんに高い高いを要求しています。お父さんは子どもたち一人ひとりを高く持ち上げてから「じゃ、行ってくるね」。子どもたちは元気な声で「お仕事がんばってね!」と両親を見送り、保育室に戻りました。

お母さんたちの働きながらの子育ては、時間的にも肉体的にも大変ですが、子どもからの「お母さん、お仕事がんばってね!」の声援を背に仕事場に向かい、「ただいま」と帰ってくる保育園は、親になった幸せを感じるもう一つのアットホームな所なのではないでしょうか。

(元品川区立保育園園長)



## 保育の中の物語(3)

# ペンギンものがたり

偶然の積み重ねから

岸井慶子

三年保育三歳児の保育室で帰りの支度をしていると、「ペンギンだ」と誰かが床に映った黄色と水色のペンギンの影を見つけた。近くにいた数人の子どもたちが床のペンギンを手で捕まえる。するとペンギンは、子どもの手の甲に乗る(映る)。角度によっては、捕まえた瞬間に自分や友達影の中に消えてしまう。保育者が窓ガラスに並べて貼ったペンギンのシールが、午後の日差しを受けて子どもたちに偶然働きかけたのだ。

ほとんどの子どもは先生の周りに集まって話を聞いたり歌をうたったり始めるが、ペンギンに夢中のその子たちはそんなことなど全く気にかけない。あの子は、床に足を伸ばし靴先をじっと見る。自分が履いている白い上履きの甲





にちようどよくペンギンが乗る（映る）ように足の角度を変えている。靴の上  
にうまくペンギンが落ち着くと、うれしそうに眺め、それでもまた靴先を動か  
し、ペンギンがなぜ靴と一緒に動かないのか確かめるようなしぐさをする。こ  
んなささいな、けれども楽しい経験を通して、光と影の関係をいつの間にか学  
んでいくのだろうか。

もう一人は、窓ガラスに貼られたペンギンのシールにいち早く気づき、じつ  
と窓ガラスを見て、「あれあれ」と指さして周囲に伝える。しかし周囲の子ど  
もたちは、それぞれの見つけた楽しみを追うことで夢中になって耳を傾けない。  
気づいたその子もそれ以上知らせようとはしない。ここが三歳らしいところだ  
なあと思う。

一人の女兒がかぶっていた自分の帽子を取り、床のペンギンの上にかぶせ  
た。ペンギンを捕まえたつもりなのだろう。隣の男児が帽子に触ろうとする  
と、「ダメ」というように強く相手の手を払う。女兒は帽子の上から軽くトン  
トンとたたき「ここに入っているのよ。私の捕まえたペンギンが」とでも言い  
たげだ。

隣の男児は、何度も女兒の帽子を動かしてペンギンを見ようとする。女兒は  
帽子のへりを両手で押さえるようにして、まるで中にいるペンギンが逃げない



ようにしているようだ。

その後、女兒もそつと帽子の縁に顔を寄せ、中をのぞき込むようにする。実は帽子の外側にペンギンは映っているのだが、帽子がたまたま紺色のフェルト地であるために気づかない。気づかないまま、帽子の中にペンギンを捕まえたと思っている子どもが、かわいらしい。この時、帽子が白い生地であったら、帽子の中にペンギンが閉じ込められているなどという楽しい想像はすぐに消えてしまっただろう。

幼児期の教育は、このように偶然の積み重なりの中に大切な経験が埋め込まれていることが多い。子ども自身も気づかないうちに、ただ楽しいから惹きつけられ没頭しているだけだ。この埋め込まれた経験をより確かなもの、よりみんなのものにしていくことが肝要と考える。

二人のやりとりを反対側（ペンギンが見える角度）から見ていたもう一人の男児が、「ここにありよ」と帽子の外側のペンギンを指でさし示す。しかし、ペンギンが帽子の中に閉じ込められていると思っっている二人は、なかなかその指摘の意味がわからない。

その後、ふと相手の指摘に気づいたのか、女兒は帽子の反対側をのぞき込んだ。上から覆いかぶさるようにしてのぞき込んだために、自分の頭の影で帽子



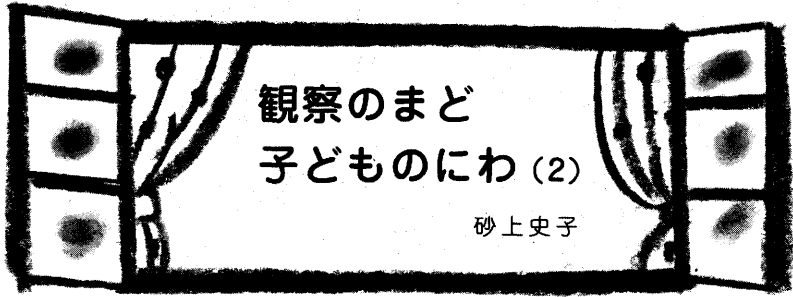
の上のペンギンを見ることはできなかった。

さらにもう一人が、窓ガラスから差し込む光を窓・ペンギンシール・床のペンギン像の三点を結ぶ線上に座り、空中の光を捕まえようとするしぐさをしている。窓の向こうの太陽から光が一直線に進んできていることを、感覚的につかんでいるのではないかと思えるようだ。

このような子どもの一連の姿に、遊びを通して体験から学ぶことの特質の一つが表れているように思う。子どもは遊びや生活の中で、それぞれ多様な、しかし物事の性質や働きその他に関する原初的な発見や気づきをする。しかしそれは、きまぐれで微かで、そのままにしておいては消えてしまう。時には誤ったままの体験的知識となることもあるだろう。ここに、体験から学ぶ危うさがある。

一方、それぞれの幼児が「今の自分の」興味関心に応じて、自分を取り巻く世界について学んでいくからこそ（体系的に整理はされていないが）活き活きとした、心に残る学びとなる。幼児期の学びの重要な特質の一つだ。危うさに配慮しつつ、その時どきに子どもが世界と出会うチャンスをとらえ、幼児の活き活きとした学び方を失わないようにするのは保育者の仕事だ。幼児教育者の力量が問われる。

（鎌倉女子大学短期大学部）



## 観察のまど 子どものにわ (2)

砂上史子

三歳児の汽車遊びに見る、  
人とのかわりの育ち

### 同じ遊びの

繰り返しを通して

幼稚園や保育所の中で子どもたちはブロックや積み木、ままごとなど、好きな遊びを繰り返します。継続的に観察を行っていると、同じ遊びであっても、遊びの中で人や物とのかかわりが変化していくことに気づきます。今回は、三歳児クラスの汽車遊びの事例を通して、子どもたちが遊びの中で他の子どもに出会い、ぶつかりながらも、他の子どもと一緒に

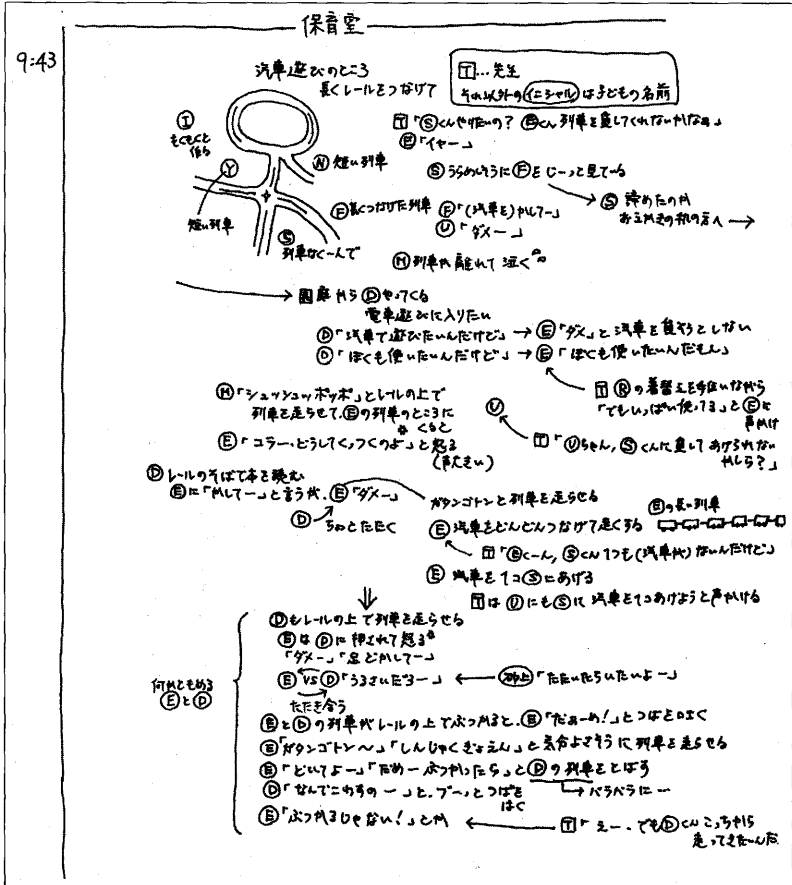
遊ぶ楽しさを感じるようになる姿を見ていきたいと思えます。

「ごうごうごうごう」

他者を排除しようとする姿

からの出発

図1は、一九九九年のある三歳児クラスの事例です。幼稚園生活にも慣れてきたと思われる五月下旬のこの事例では、Eくんが木製のレールを長くつなげています。小さな木製の汽車を何個も長くつなげているEくん、短い列車のKくんとNちゃん、一つも汽車を持っていないSくんがいて、さらに、そこへDくんもやってきます。図1では、汽車のないKくん



▲図1：5月下旬の汽車ごっこ

の気持ちを察した先生やDくんが、Eくんは汽車を貸してほしいと言いますが、Eくんは「イヤー」「ダメ」と貸そうとしません。

この場面のEくんは、長い列車を走らせたいという自分の思いを実現したい一心であり、自分のしたいことを追求する遊びの姿として理解できます。今井和子氏（一九九一）

は二、三歳児が遊びの中で物をありつけた使用うことがよく見られる

ことを指摘し、「ありつたけの物を身に付けて満足感を味わう体験をくぐりぬけた子どもたちはやがて、物から解放されたように、自分の必要なだけ選んで使うようになったりするものです」と述べています。二歳から三歳の時期に物をたくさん持つことが子どもには重要であり、かつ自然な姿であると受け止めることが大切ではないかと思えます。

ただし、集団で生活する保育の場では、他の子どももEくんと同様に汽車を走らせたいという思いがあり、それをいかに調整していかかが保育者の役割となります。特に、Sくんのようにじっと見て

いるけれど自分から主張できない子どもの気持ちを含みながら、たくさん使っている子に他の子も汽車を使いたいということを知らせていく必要があります。

図1の中で先生は、「Eくん(列車を)貸してくれないかなあ」「Eくん、Sくん一つも列車がないんだけど」と声をかけ、その結果Eくんは、Sくんに汽車を一個譲っています。子どもと子どもの橋渡しとして、保育者がこまめに他の子どもの存在や欲求を伝えていくことが大切なのだと思えます。

また、図1でEくんはレールの上で自分の汽車と他の子の汽車が

ぶつかると、怒って大きな声を出したり押ししたりたたいたり、他の子の汽車をバラバラにしたりしています。ぶつからずに遊べることはよいことですが、このように子ども同士がぶつかり合うことは、

人とかかわりの出発点として重要な経験であるといえます。担任の先生からうかがった話では、このときのEくんは「他者」は自分にとってじゃまな存在であり、排除しなくてはならないものと感じていると理解したうえで、Eくんが少しでも他者とかかわることの楽しさを経験してほしいと考え、かかわっていたとのことでした。

三歳児(あるいは四歳児の)入

園当初のいざごさは、子どもが他者と出会い、他者を肯定的な存在として受け止めるようになる過程として重要であり、その後には保育者の個々の子どもについての理解に基づく援助があるといえます。いざごさをマイナスととらえるのではなく、それが人とのかわりの出発点であり原点としてとらえることが必要となります。

「作ってあげるからー」

他者に応じつつ

自分を主張する

図1から、二週間後の六月下旬の観察では、Eくんは汽車を長くつなげて、自分の思いを強く主張

して遊びつつも、自分の列車を走らせるために、Kくんに別のレールを作ったり、Gくんは汽車を三個貸したりする姿がわかります。

自分を主張するだけでなく他者の存在を認めて対応し、他者に合わせて譲れる幅も少しずつ広がってきたことが感じられます。

また、六月下旬の観察では、遊びのイメージをめぐって、KくんとEくんが駅の名前について、「本郷三丁目」「ちがうよー、目白駅」などと言いかう姿も見られました。いざごさには違いありませんが、その原因は、図1に見られた汽車が欲しい、汽車がぶつかったということから一歩進んで、同

じイメージを共有しようする中で生じたズレにあるといえます。つまり、一緒に遊んでいるからこそ、生じるいざごさに変化してきています。この点から、いざごさの頻度や激しさではなく、何をめぐっていざごさが生じているのかといういざごさの「質」に注目することで、遊びを通しての子どもを育ちをより具体的にとらえることができると考えます。

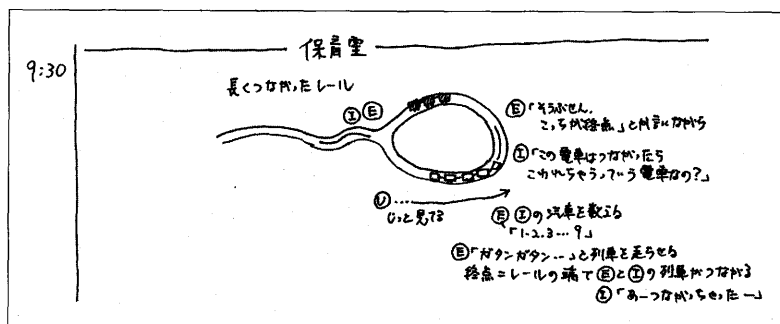
「いっしょにやろー」

他者と遊ぶ楽しさを求めて

Eくんたちの電車の遊びは二期以降も続いていきます。図2と図3の電車遊びの様子からは、一

学期とは異なり、たくさんの汽車をつなげようとすることはあっても、先生の言葉かけや他の子どもに「かして」と言われてすぐに汽車を譲る姿が見られます。また、レールをつなげる際に他の子にレールの道筋を話すなど、それぞれがレールに列車を走らせているのではなく、一緒に列車を走らせているという意識がより強くなってきたことがうかがえます。

レールの端っこでEくんとIくんの列車がつながった際の「あー、つながっちゃったー」という言葉（これはIくんの言葉ですが、おそらくEくんも共有していたといえます）を、図1の「コ



▲図2：10月下旬の汽車ごっこ

ラー、どうしてくつつくのよ」という言葉と比べてもそのことはよくわかります。

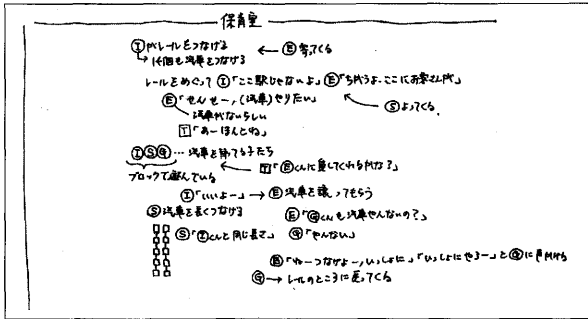
そして、二学期も中盤にさしかかった図3では、いつも汽車をたくさん使っていることの多かったEくんが、「汽車がない」と先生に訴えています。このとき、列車を手に入れた後でEくんがGくん「汽車やんないのー」「ねー、いっしょにつなげよー」「いっしょにやろー」と声をかけている姿は、他者と共にあることを意識し、他者と一緒に遊ぶことの楽しさを求めている姿といえます。汽車遊びは、自分一人でやるものではなく、誰かと一緒にやるものという



意識がEくんの中にもあるのだと思われます。

入園して間もないころ、ちよつとしたことでぶつかり合っていた子どもたちが、一学期の終わりや二学期に入つて落ちついて人とかわるようになっていくことは、今回の事例にもあるように、「楽しい」から行う「遊び」だから子ども同士の間で欲求がぶつかり合い、その経験が人とかかわりを学ぶうえで重要であることを示しています。同時に、こうした変化は直線的に右肩上がりで見るといふよりも、他の子どもに譲れたり譲れなかつたりするなど、ジグザグの過程をたどっていくも

のであり、そのジグザグ具合をうまく抱えて、時に軌道修正していくところに保育の意味があるのだと思います。



▲図3：11月上旬の汽車ごっこ

それはちよつと、事例の中で先生が、Eくんにとつて「他者」がどのような存在であるかをふまえて、どのような経験をしてほしいかという願い（ねらい）をもつて、その時どきの場面で相手の思いを伝え、大きな声を出さなくても伝わることや、「かして」と言うのと貸してもらへることなどを具体的に投げかけていくことの中に埋め込まれているといえます。

千葉大学 教育学部 保育学  
保育内容と発達との連関を研究

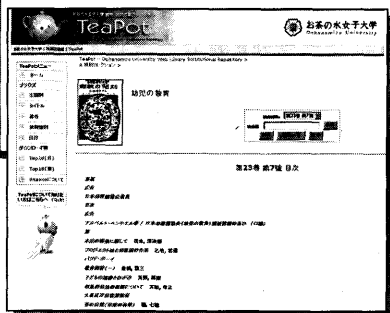
引用文献

今井和子 「探索からごっこへ」『発達』No. 46, vol. 12, ミネルヴァ書房  
一九九一年

## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (3)

# 『幼児の教育』をネットで読む キーワード「遊び」から出合った記事

横井 紘子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

### 私にとっての『幼児の教育』の存在

私が『幼児の教育』を知ったのは、大学に入ってからでした。そのころは、研究室の棚にずらっと並んでいましたが、歴史や思想に疎い私は、昔の文章を「史料」として扱う方法がよくわからず、恥ずかしながら古い月刊誌をひも解こうとはしませんでした。興味関心がわいた保育関連の何かしらの事象について素朴に知りたいと思っても、膨大な巻数に圧倒されて、数巻手に取ってバラバラとめくってみるものの、「これだ」と思える記述に出会えないとすぐに挫折し、インターネットで関連するホームページを検索したり、論文検索サイトを利用したりすることが常でした。

私のような歴史研究を専門としていない学生や日々の実践を生業としている保育者にとって、『幼児の教育』を「史料」として読むことは稀だと思います。しかしここ数年『幼児の教育』を通読しておりますが、

歴史的価値が高く重みのある月刊誌であることは重々承知であり、常にその背後にある威光をどこかに感じながらも、私はこの月刊誌に対して非常に近しさを抱いているところがあるように思います。誤解を恐れずに言えば、私にとって現在の『幼児の教育』は非常に身近であり、哲学書や学術書を開く気分になれないときにでも手に取ることが苦痛でなく、疲れた仕事帰りの電車の中でも読もうと思える月刊誌なのです。

このたび、『幼児の教育』がネット公開され、創刊号までさかのぼって、電子ファイル形式で記事閲覧できることは、『幼児の教育』を「史料」として読む研究者の方々に多くのメリットがあることと思います。しかし、電子化された「史料」の扱い方には十分な配慮が必要であると、無頓着な情報の乱用に対し、警鐘が鳴らされているようです。歴史研究者にとどまらず、大学入学時にはすでにインターネットを利用して情報を得ることが当たり前となっていた私たちの世代の研究者

においても、ネットで得られた情報を扱う際に配慮すべき事柄を改めて確認する必要があると思います。

とはいえ、手に取って頁を繰ることにちゅうちょしてしまっただけに歴史を備えた『幼児の教育』も、ネット上で簡単にアクセスできるようになったことで、ずいぶん身近に感じられるようになりました。検索機能があり、興味関心のある記事に簡単にたどりつけるという点も、距離を縮めた大きな要因の一つです。

実は、卒業論文の構想を練っている際に、「今の子ども」の『遊び』が変わってきていると言われていたのが、本当に変わったのだろうか。何が変わったのだろうか」と素朴な疑問を抱いた私は、昔の子どもの遊ぶ姿を求めて、『幼児の教育』を手に取ったことがありました。しかし、見慣れない当時の綴りや文体の解読に苦戦した挙げ句、膨大な巻の中から自分が欲する記事を見つけ出すことができず、途中でさじを投げてしまいました。そこで実際に、「遊び」というキーワード

ドで検索をしてみました。今回、「遊び」というキーワードから、どんな内容の記事に出合えるのか、ワクワクしながらマウスをクリックしました。

### いろいろな「遊び」に出会う

その結果、タイトルに「遊び」という言葉が入っている記事が八十五件ヒットしました。「○○遊び」というタイトルが多いことが一目でわかります。「室内遊び」「自由遊び」「リズム遊び」といった言葉も見られ、「遊び」が場所や様態によって古くから区分され、さまざまに価値付けられて語られていたことが伺えます。

しかし、何よりもまず私の心を惹きつけたのは、さまざまな遊びの名称です。どんな遊びであるのか、おおよその想像がつくものもあれば、全く検討がつかないものもあります。「これはいったいどんな遊びなのかしら」と、好奇心がムクムクと騒ぎ出し、次々とファイルを開きました。記事の内容の多くは、その

「遊び」の遊び方や遊ぶ際のアドバイ스가ていねいに書かれており、「遊び」の指南書といえるものであるように思われます。今でこそ、さまざまな「遊び」を紹介する本は書店にあふれていますが、当時の保育業界においては、「幼児の教育」がその役割の一端を担っていたのでしょうか。

とはいっても、遊び方や準備するべき材料などを記号的に記載しているような今日の多くの「遊び」の指南書とは、ずいぶん性格が異なっているように感じます。それは、子どもたちが実際に遊ぶ姿が併記されていたり、その遊びがいかに素敵で楽しいものかについて流麗な文章が添えられていたりしているからかもしれません。また、その「遊び」が、どこから飛び出してきて単独で浮遊しているのではなく、実際の「生活」という大きな流れに根付いている印象を受けるような文章が多いように感じられます。「遊び」の「辞典」としてではなく、時代を反映した「読み物」とし

ての「遊び」の紹介といえるかもしれません。

### 「遊ぶ」子どもたちに出会う

検索結果の一番上には、「お角力遊び」とあり、力士の紙型が載っていました。ほかに、「八百屋遊び」「郵便局遊び」「おもちゃ屋遊び」「汽車遊び」……など、今日においても楽しまれている「遊び」も多くあり、その「遊び」に興じる子どもたちの姿が保育者の言葉でいいいに記述されているものもあります。そのような保育実践事例ともいえるような記事を読むと、私自身が実際に保育の中で出会った「遊び」が自然と思いつき出され、そこで活き活きとした子どもたちの姿と重なり、その文章に子どもたちが息づいているように感じられ、思わず引き込まれてしまいます。

一つ、記事を取り上げたいと思います。発行年数が一九二七年、東京女子高等師範学校附属幼稚園山の組の実践事例、「おもちゃ屋遊び」からです。山の組で

「おもちゃ屋さん」を大々的にやることになり、準備を子どもたちと共に進めていったようです。「前日にはお室の大體の裝飾が出来、全園の各組にポスターが配られました。山の組は云ふまでもなく、園全體何となく浮き立ってゐる様に感じられました」という記述があります。二〇〇七年度、私がお茶の水女子大学附属幼稚園で年少クラスの川の組で担任として子どもたちと過ごしていたときにも、年長児が、「こどものくに」という、ぬいぐるみ屋、ケーキ屋、回転寿司屋などの



内校師範高等女子文京東  
會福園種幼本白

## 幼児の教育

第七卷

第一号	第二号	第三号	第四号	第五号	第六号	第七号	第八号	第九号	第十号
おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び	おもちゃ屋遊び

『幼児の教育』第27巻  
第1号 (1927年1月発行)  
「おもちゃ屋遊び」  
p 54 ~ p 55掲載

ありとあらゆるお店屋さん、博物館、ゲーム、お化け屋敷、水族館、ショー、海賊船に乗って遊覧あり、という夢のような空間を、遊戯室に創り上げてくれました。前日にはポスターを持って年長児がお招きに来てくれ、園全体が「こどものくに」が待ちきれない雰囲気になっていました。

一九二七年の附属幼稚園では、「どこの組の子供も『山の組のおもちや屋、もう始まるんぢやない?』と云つて、ろく、落ち着いてお仕事が出来なかつたそうです」。二〇〇七年度の川の組も、子どもたちはいつもより早く支度を済ませ、廊下の奥を見ながら、「まだかな」「ちよつと行つてみようかな」などと、そわそわしていました。

また一九二七年の附属幼稚園では、ほかの園児を迎える側の子どもたちは、「我れ開ぜず焉といふ態度を出してゐる番頭さんや、夜店の競賣そつくりの呼聲を出して客を呼び集めてゐる番頭さんもありました」。二

〇〇七年度の年長児も、保育者顔負けのショーの司会をする子もいれば、自分が作った場所に自信をもち、いつもより凛として年少の子どもたちとかかわっている子、あまり目立たない場所に陣取つてしまひどう呼込みをしようかと少し尻込みしている子、一人ひとりの子どもが自分なりに「こどものくに」で過ごしていた姿が思い出されます。

八十年もの年月差を、この文中の子どもの姿からは感じられません。むしろ、その活き活きとした姿に本質的な違いは認められないようにも思われます。文体に古めかしさは感じますが、そこで浮かび上がってくる子どもたちの姿には時代の差や理解しがたさは全くありません。「遊び」へと転じるきっかけや、何におもしろさを感じるのかは、八十年の間に物理的に生活が大きく変化したこともあり、多種多様になってきていますが、それでも昔から変わらない子どもたちの姿を認めることができるように思います。

## ネットの活用

私は、『幼児の教育』を読む際、研究論文に向けて知識を蓄えることや自分が今もっている知識を試すことを一義的な目的とはしていない場合が多いです。しかし、頁をめくり、ある文章に出合った途端、思わず閉じかけていた目が見開いたり、突如として自らにくさびが打ち込まれて揺さぶられたりする経験がしばしばあります。このような経験は、誰しもあることでしょう。

私のような構えで『幼児の教育』と対峙している読者にとつては、ネット公開のおかげで身近な『幼児の教育』が増えたといえるでしょう。それは同時に、『幼児の教育』を通して子どもの姿が活き活きと眼前に現れるような記事や、自らの存在を揺さぶられたりするような文章に出合う機会が増えたとも換言できるのではないのでしょうか。

また、詳細は紹介できませんが、今回の検索で出合った第二次世界大戦の最中に書かれた「遊び」の記述に、思わずスクロールする手が止まったこともありました。身近になりはしながらも、日本の幼児教育の黎明期を支えてきた歴史ある月刊誌であることに変わりはありません。日本の幼児教育をどのように語ればよいのか、出来合いの思想も言葉もない時代に、保育に携わる人々が、時にはさまざまな時代の大きな波に流され、時にはあらいながら紡ぎだしている文章には押しつけがましくはない力強さを感じます。

確かに、クリック一つで目の前から消滅してしまうはかない邂逅かいこうですが、私に啓発的な光を与えてくれる記事に敬意を払いつつ、その出合いを大切にしながら、『幼児の教育』との新しいつきあいを模索してみようと思います。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科)

## 韓国の障害児保育について

— 障害児専門保育施設を中心に —

金 允貞

## \*はじめに

二〇〇八年、母国の韓国にしばらく滞在したとき、久しぶりに学部時代を過ごした大学のキャンパスを訪ねました。日本で博士号を修得した恩師にも久しぶりに会うことができて、日本での生活についていろいろな話もしました。その話の中で、大学のとき親しかった友人が先生の勤める大学院で勉強し、現在障害児専門保育施設（障害児を専門とする保育施設。以下障害児専門保育施設と表記します）で主任教師として働いていることを聞きました。

卒業してから八年、大学時代を共に勉強した友人と

の連絡もつながらずまま日本での留学生生活を続けてきた私は、この機会に会いに行こうと思ひ立ち、友人が勤める障害児専門保育施設にすぐ足を運びました。

大学からバスに乗って一〇分ほどで着いたその障害児専門保育施設は、ジャンミオリニジップという保育施設です。この施設は韓国の馬山市にできた最初の障害児専門オリニジップで、馬山市が設立して馬山教会に委託・運営している障害児専門保育施設です。私が大学生だった約十年前には、障害児だけが通う保育施設は聞いたことがなかったため、いつからどういふ背景でこういう施設ができたのか知りたくなりました。

そこで私はこうした障害児専門保育施設を生んだ韓



国の障害児保育の変化と、障害児専門保育施設がどのようなものか調べてみたので紹介していきましょう。

## ＊「保育」という言葉について

韓国では、「幼児教育」と「保育」という言葉が厳格に使い分けられています。韓国の幼児教育と保育の制度は二元化していて、教育科学技術部が幼児教育を、また女性部が保育を、それぞれ管轄しています。幼稚園と保育所が三元化体制にあることは日本と同様ですが、日本では幼稚園でも保育という言葉を使います。

一九九一年一月、「乳幼児保育法」が制定される前までは、保育の代わりに「託児」という言葉が使われ、託児事業や託児施設と呼ばれていました。それが「乳幼児保育法」の制定を通してやっと託児から保護と教育を統合する「保育」という言葉を使うようになったのです。乳幼児保育法では保育をこのように定義しています。「保育とは、乳幼児を健康で安全に保護・養育し、乳幼児の発達の特性に合う教育を提供す

る社会福祉サービスを指す」、また「保育施設とは、保護者の委託を受けて乳幼児を保育する施設を指す」と定義されています。従って、障害児保育とは保育施設で行われるものを指します。幼児教育の分野では、小学校以上の障害児教育と同じく特殊教育と呼ばれています。

## ＊障害児保育の流れ

韓国の「乳幼児保育法」及び「児童福祉法」に依拠し実施されている障害児保育は、一九九四年ソウル市にある二つの総合社会福祉館（福祉センター）でモデルケースの障害児託児所を設置・運営したことから始まりました（二〇〇二年、李マンウ）。その後一九九五年、このモデルケースの事業を基礎に、政府は障害児保育に対する指針を決定し、一九九六年、乳幼児保育法の施行規則を改定して、障害児保育に関する規定を新設しました。そして一九九七年には、障害児専門保育施設に関する設置指定と運営基準が定められました（二〇〇三年、李ゲユン）。しかし、障害児保育施設は

国からの支援があまりなく、施設を利用する子どもの数も少数にすぎませんでした。幼児教育の分野では、一九九四年に改訂された特殊教育振興法に該当する三〜五歳の障害児に対して無償で教育が実施されていましたが、保育施設は支援の対象にならなかったために、保育施設に通う障害児の家庭は経済的に困難な場合が多く、保育施設に通う乳児は六%に至らなかった状況でした（二〇〇一年、徐文姬）。

そういう状況の中、一九九九年に全国の障害児専門保育施設協議会が結成されたことよって障害児保育の無償保育について議論されるようになり、二〇〇三年三月から無償保育が全国的に実施され、全国の保育施設を利用してすべての障害児が無償保育の対象になりました。無償保育の実施は保育施設を利用する障害児に対して家庭の所得を問わずに国が責任をもって保育するという方針を表明した、障害児保育分野での公保育の実現化を意味します（二〇〇三年、金ホスン）。この無償保育の実施を皮切りに、政府は障害児

専門施設を優先的に支援し、拡大していきました。<sup>3</sup>そして、現在韓国の障害児専門保育施設数は、二〇〇一年の調査で五十九箇所（保健福祉部、二〇〇一年保育統計）だったのが、百四十四箇所（中央保育情報センター、二〇〇六年保育統計）にまで増えています。

### ✿ 障害児専門保育施設

韓国の障害児保育施設は、障害児だけを保育する専門施設と一般の保育施設で保育する統合保育施設と区分することができます。障害児専門保育施設とは、障害児を専門と保育する施設（国公立、法人、民間、個人、家庭保育施設）を指します。二〇〇八年韓国の「保育事業案内」の定義によると、「障害児専門保育施設とは、障害児だけを二十人以上保育するために乳幼児保育法施行規則による施設及び設備を備え、常時十八人以上の障害児を保育する施設中、市・都知事または市・郡・区庁長が障害児専門施設と指定した施設」です。<sup>4</sup>現在全国の障害児保育施設数は統合施設が七に対

して、専門施設が三という比率で多くなっています。しかし、専門施設に通う子どもの数が統合施設より圧倒的に多いのです。

この施設は、○歳から十二歳までの障害児が入所の対象で、障害児福祉カードを持っている子どもの保育料は無償になります。障害児三人に保育士（韓国では保育教師といいますが）が一人、三人を超えるごとに保育士を一人増員します。そして、障害児九人に対して教師の中で一人は必ず特殊教師の資格をもっている者を配置するように規定されています。また、保育士と特殊教師以外に治療士（療法士）が共に保育をしています。クラス構成は障害の種類及び程度によって編成・運営するように規定されていますが、実際の調査によると異年齢の構成が最も多く（五十%強）、次に障害の種類によるクラス構成になっています（二〇〇六年、虚ジンミ）。

障害児専門保育施設では、施設内にはほぼ一〇〇%治療室（療法室）を保有して、主に行動療法及び言語、

理学、作業療法などを中心に療法サービスが行われています（二〇〇七年、鄭ヨンスク・李サンボク）。また、障害児のための政府の人的・行政的・法的支援も療法士の支援や療法士の配置を義務化する支援が一番多く行われています（二〇〇六年、虚ジンミ）。これは韓国の障害児保育がリハビリや治療を保育の中心と考えられていることや、障害児専門保育施設の機能が主に治療中心になっていることを反映していると思われます。

李（二〇〇三年）は、障害児専門保育施設の機能の中で早期リハビリサービスが障害児保育の最も重要な内容であると述べながら、障害児保育施設は障害児のリハビリという専門的機能を担っていることで、一般保育施設とは一線を画していると言っています。金（二〇〇三年）は、障害児保育事業は、障害児に必要な成長・発達のサービスを提供することによって障害児の発達と障害児家庭の福祉を増進させる社会福祉事業であると述べながら、障害児には障害の克服・緩和

のための専門的なりハビリプログラムが必要とされる  
と語っています。また李（二〇〇二年）は、障害児は  
一般児と異なる発達の特性をもっているために、彼ら  
の発達特性や要求に合う保育サービスを提供する必要  
があると述べました。こういう研究者らの主張を見て  
も、韓国の障害児保育は障害児のリハビリや治療を一  
番大事に考えていることがわかります。

### ✿ 障害児保育と生活の大切さ

友人が勤めている障害児専門保育施設ジャンミオリ  
ニジップを訪ねたときに、私は彼女と施設での保育に  
ついていろいろな話をしました。そこで一番印象に  
残ったことは、一緒に保育をしている特殊教師、療法  
士、保育士との間で保育観や子ども観の違いがある  
ということでした。友人の話によると、保育士は子ども  
と生活しながら見える子ども本来のありのままの姿を  
重視したいと思うけれども、そういう考えが特殊教師  
や療法士にはなかなか伝わらないそうです。たとえ

ば、今楽しく遊んでいるのに療法の時間だといって療  
法室につれて行かれてしまうときの子どもの表情を見  
ると、それが本当にこの子どもの幸せになるのか、子  
どものために本当にいいのかと考えてしまうというこ  
とです。

施設に來ている子どもは、特殊教師や療法士と行う  
療法の時間以外、保育室ではかの友達や保育者と共に  
遊びながら生活を送っています。そして子どもと生活  
を共にしている保育者にはその場で何が起こっている  
か、子どもが何をどう感じているかが伝わります。

子どもは生活を送る中で多くの人々と出会い、関係  
を結びながら成長していきます。それは障害をもって  
いるか否かに関係ないものです。保育はこういう子ど  
もの生活を保障しなければならぬものでしょう。こ  
こで、私はリハビリや治療が必要ではないということ  
を言っているわけではありません。もちろん、一人ひと  
りが今よりよい生活ができるような適切な治療を受け  
ることは大事なことです。しかし、障害をもって

からと言って保育が子どもの生活より治療という目的にばかり向かっていくと、子どもの生活の中で大切な部分が抜け落ちてしまう気がします。

## ＊おわりに＊

今回、友人の勤めている障害児専門保育施設を訪問したことをきっかけに、韓国の障害児保育について私自身多くのことを学び、感じることができました。日本で約四年間、私は子どもの存在感や自主性をできるだけ尊重しようとする私立の養護学校（現在特別支援学校）に実習生の立場で通いましたので、そういう視点から韓国の障害児専門保育施設を見ることができたと思います。障害児保育施設ができて十年あまりの韓国で、障害児保育がリハビリや治療だけではなく、今後もっと子どもの生活や人々との関係の大切さにもより目を向けられるようになったらと願っています。

（お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科

発達人間科学専攻 保育・児童学領域 博士後期課程）

## 注

- 1 ジャンシはバラという意味、オリニジップは子どもたちのという意味で保育所を指す。
- 2 韓国の南にある人口約四十万人の小都市。
- 3 保健福祉部（現在の保健福祉家族部）は毎年十箇所ずつ政府支援施設として障害児専門保育施設を増加させ、地域ごとの均衡を保つようにした。
- 4 保育事業案内（二〇〇八年）

[http://www.bscare.or.kr/Main\\_Disp.Asp?menu=menu2\\_1](http://www.bscare.or.kr/Main_Disp.Asp?menu=menu2_1)

## 参考文献

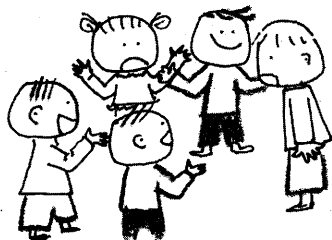
- 徐文姫 『障害児保育現況と政策課題』 韓国保険社会研究院 二〇〇一年
- 李マンウ 『障害児保育の活性化方案』 立法情報第五十六号 国会図書館立法電子情報室 二〇〇二年
- 金ホスン 『障害児無償保育政策樹立の背景と今後計画』 国立特集教育院 特集教育政策フォーラム 二〇〇三年
- 李ゲユン 『障害児専門保育実態と改善方向』 全国障害児児童専門保育施設協議会 「ハムケヘネム」（ともに成し遂げようという意味）二〇〇三年六月
- 虚ジンミ 『障害児専門オリニジップの教育課程運営の実態』 総信大学校養育大学院 教育学科 幼児教育専攻 修士論文 二〇〇六年
- 鄭ヨンスク・李サンボク 『障害児保育施設の実態及び支援現況と政策的提言』 大邱大学校 社会科学研究所 社会科学研究 第十三集 第一号 三十一―六十二頁、二〇〇七年

保育の現場から

## 「みんなの中の私」

ということ

伊集院理子



五歳児の子どもたちが、新しい世界に飛び立っていき時期が近づいてきました。卒業の前にこれまでの生活がいろいろと思い返されるこのごろです。幼稚園の生活の中で子どもたちそれぞれが自分のやりたいことを見つけ、それとことんやる生活が本当に積み重ねられてきたのでしょうか。さまざまな体験を重ねながら、昨日から今日、今日から明日と、子どもたちの意欲がどんどん引き出されるような生活を展開できていたでしょうか。

今担任している子どもたちとは、五歳児になってから生活を共にすることになりました。前年度も五歳児を受けもっておりましたから、二年連続の五歳児担任ということ、それは、だいぶ長くなってきた幼稚園教師としての経験の中でも初めてのことでした。私ももの園では、二年ないし三年、継続して子どもたちを担当することを基本としてきました。

四月当初、お帰り前などの集まりの場面での落ち着

かない雰囲気がとても気になりました。担任も変わって、それは当然の姿なのですが、こちらが話せばずっと聞こうとしてくれていた少し前まで担任していた子どもたちとの違い、自分と子どもたちとの関係の違いをどうしても感じてしまい、集まりの場面で子どもたちに自分の言葉を聞かせることに私は躍起になっていました。躍起になればなるほど、言葉は子どもたちの頭上をむなしく通り過ぎていくようにとらえられました。一人ひとりの子どもたちの様子より、集まりの場では聞くことに集中してほしい、五歳児であれば自分本位に行動するばかりではなく、周りの状況を受け止め、どう行動すべきか自分で考えて行動を調整できるようにであってほしいという、保育者の一方的な思いからしか、子どもたちを見られなくなっていたのだと思います。

鯨岡峻氏は、保育の場においては、子どもたちが自分なりの思いをもち、それを実現しようとする「私は

私」という感覚と、周囲の友達と共にいることや周囲の友達と一緒に何かをすることに向かう「私はみんなの中の私」「私は私たちの一人」という感覚の二つの感覚を子どもたちの中に育てているのだ、ということを書いていきます。

「みんな」は、「一人ひとりが集まったのみんな」であり、「みんな」の中の一人ひとりに向けて、私はメッセージを届けていたのか、その前に、子どもたちの一人ひとりのメッセージを聞こうとしていたのか……自分のあり方が問われました。

日常の保育場面の中で、子どもたちが「自分」のやりたい遊びを選んで、それを実現しようとしているときに、一人ひとりの思いに添えていくこと、一人ひとりの「思い」が友達の「思い」ともつながり、その「思い」が共に実現されていくように支えていくこと、そのことから始めなければ、「集まりの場面では、先生の話をお聞きしよう」とお題目を唱えてみても、それ

は子どもたちの心の中に届いていかないのです。まず、保育者が子どもたち一人ひとりとていねいにやりとりを重ねていくこと、それは、何ら三歳児担任のとき、四歳児担任のときと変わらない保育者として一番大事な姿勢なのだということを久々に深く感じました。

子どもたちそれぞれが「自分」というものを確立して、「自分自身の思い」を出して、その「思い」を遂げていくようになるには、保育者との信頼に値する関係の積み重ねを抜きにしてはあり得ないこと、子どもたち一人ひとりにとって、保育者が信頼に値する人間として位置付くためには、ある程度の期間が必要だということ、五歳児からの子どもたちとの出会いが、私を原点に立ち戻らせてくれたように感じました。

さて、「みんなの中の私」「私は私たちの一人」ということをお題目ではなく自分の感覚として子どもたちがもてるようになっていくには、保育者との関係だけ

が問題になるのではなく、子どもたち同士の関係が何といつても大事になってきます。

五歳児の生活の中で、気心の知れた仲良しとの関係だけではなく、いろいろな友達とかかわる機会をもち、違った考えをもった友達と意見を交し合ったり、相談したりすることはとても大事な機会になります。

子どもたちが自分で選ぶ遊びを中心とした生活においては、どうしても子どもたちの人間関係は限られてきます。そこで、五歳児の後半の生活においては、これまでの子どもたちの人間関係、一人ひとりの子どもの性格・特性などを熟考し、クラスを超えて学年を四つのチームに分けて、遠足、運動会などの行事のときや、園での生活において学年で役割を担っていくときにチームを基盤にして行動をしていきました。

二学期に入って、生活が軌道に乗り出したころ、学年で集まり、チームのメンバーを発表しました。十月初めの運動会に向けて、チームカラーやチームの名前



を相談する機会を何度かもち、メンバー全員が合意の下に決めていくことを目指しました。

チーム名を決めるときのこと、四つの部屋に分かれてチームで弁当を食べた後、メンバーで相談して名前を決める予定でした。チームの色を決めたときの経験もあり、みんなで決めるということがどういふことなのか、子どもたちも少しずつわかってきています。あるチームでは、六つの名前に絞られました。その六つから一つに決めるのに、「くじ引きで決めよう」という意見も子どもたちの中から出てきていました。しかし、「くじ」「多数決」で決めてしまうのではなく、話し合って一つの名前に決めてほしいと私は思い、相談を続けることにしました。

話し合いを重ねる中で、違う意見の友達を説得するために、どうしてその名前がいいと思うか、その理由も友達に伝えていきました。「ペガサスは馬みたいなんだけど、羽根があつて、空も飛べて、とっても速い

んだ」「速そうな名前の方がいいよ」「僕たち、白チームだし、ペガサスは白いんだよ」など、説得力のある意見も出てきて、大方の子どもたちは「ペガサスがいい」という流れになりました。その中で、A夫は「電車」、B夫は「カマキリ」の意見をなかなか変えようとしません。それぞれに自分が大好きな物を名前の候補として考えてきていたのです。運動会に向けてチームの旗を作る予定があることも子どもたちはわかっている、旗に、電車の絵を描いてもいいから、チームの名前はペガサスにしようよ」という説得で、A夫はやっと同意しました。B夫はその説得でも、「カマキリ」という自分が考えてきた名前を頑として主張し続けました。チームでの話し合いは時間切れとなり、もう少し時間を取って考えてみることになりました。クラスに戻ってきてても、同じチームのメンバーで、B夫と関係が深いC夫は、B夫を説得し続けました。C 「Bくんが、ペガサスでいいよ、って言うってくれ

ないと、チームの名前が決められないんだよ。

Bくんは、カマキリがいいんでしょ。カマを持つている方がいいの？ カマがないとだめなの？

Dくんは、ペガサスがいいんでしょ？ (同じ

チームのメンバーの一人に意見を求める)

D 「ペガサスの方が、大きいし速いよ。足があるのに飛べるんだ」

C 「バッタはどう？ (カマキリと) バッタとどっ

ちが好き？ 昆虫が好きなの？ 自分も最初は

クワガタがよかつたんだけど、みんながペガサスがいいって言うから、変えたんだ」

傍らにいた私は、C夫の説得に聞き入りました。大人が安易に言葉を挟むことを拒むほどの真剣さがそこにはありました。カマキリがいいというB夫の気持ちをしつかり受け止めながら、自分の例を引き合いに出したり、同じチームのメンバーに意見を言ってもらったり、カマキリにこだわるB夫の気持ちを動かすため

に、「バッタ」という別の昆虫の名前をあえて出してきたり、いろいろ考えて、B夫が気持ちを变える気になるよう、落ち着いた口調で何度も繰り返し語りかけていました。

C夫の説得後、私も少しだけ説得を試みたにもかかわらず、その日はB夫が気持ちを变えることはありませんでした。降園時に保護者にもことのあらましをお伝えして、「家でも一緒によく考えてあげてください」とお話ししておきました。

次の日、学年全員でお弁当を食べることにして遊戯室に集まりました。お弁当の前に、各チームの名前を全体に報告していきました。最後にB夫のチームの番となり、B夫にマイクを渡すと、何と「ペガサスチームです」と大きな声で報告したのです。すると、同じチームのE夫が「マイクを貸して」と言ってきました。E夫は、最初からペガサスがいいという意見を言いつづけてきた一人でした。E夫は、特定の友達にしか

なかなか心を開こうとしないところがある子どもでした。そのE夫が、どうしても言いたいと言って「Bくん、ありがとう」と、B夫に向かって、そしてみんなに向かって伝えたのです。

B夫の保護者の話では、名前を決める前日から一生懸命考えて「カマキリ」という名前に決めていたこと、ペガサスのことを自宅でも調べて促したものの、なかなか意見を変えようとしないので理由を聞いてみると、ペガサスは架空のものなので、実存するものがないということだったようです。帰宅した小学生の姉が、みんなで決めるには自分の意見を変えなくていけないことも出てくるということを、自分の経験から話してくれたことが、気持ちを変える引き金になったということでした。

簡単には自分の意見を変えようとしなかったB夫、その背景には、好きなカマキリに対する強い思いだけではなく、実存するものと架空のものということまで

深く考えていたというB夫、そのB夫を一生懸命説得しようとしたC夫、そして自分が最初から決めていた意見にB夫が考え直してくれたことに対してみんなの前で感謝の気持ちを伝えたE夫、子どもたちの真っ直ぐな姿から本当に多くのことを学びました。

このようなことをていねいに積み重ねていく中で、「みんなの中の私」「私は私たちの一人」という感覚の根っこを身体の中に宿していくのだと考えます。

これから先の生活の中でも、たくさんの人たちと出会い、かわわって、「私は私」「私は私たち」という両方の感覚を、大きく育てていってくれることを願ってやみません。  
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

#### 参考文献

- 鯨岡峻／著『ひとがひとをわかるということ 問主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房、二〇〇六年  
鯨岡峻・鯨岡和子／著『保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門』ミネルヴァ書房、二〇〇一年

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(27)〉

## アメリカ合衆国の 保育事情・保育思想(2)

— 進歩主義教育思想の流れをくむ保育の思想 —

塩崎美穂

### アメリカの進歩主義教育

お茶の水女子大学の附属幼稚園（以下、附属幼稚園）で大切にされてきた保育の思想といえ、津守眞氏の指摘どおり、それは倉橋惣三の保育観によく表されているでしょう。つまり、「フレーベルが説き、米国の進歩主義教育が主張したこと、幼稚園を幼児の遊ぶ場とする」保育の思想であり、「遊びを中心とする幼児の生活の流れ」を守る決意の思想です。津守氏

は、厳しい戦時体制下においてさえも「子どもの遊びを守る」保育が附属幼稚園で維持され得たのは、保育を守る倉橋の決意があったからだと述べています。

ここで津守氏が言及する「進歩主義 (progressivism) 教育」とは、十九世紀末から第一次世界大戦後にかけて、それまでの書物や教師を中心とした主知主義的な教育を見直す新教育 (New Education) の運動の中、児童研究 (child study) を苗床にアメリカ合衆国（以下、アメリカ）で展開された教育改革運動のことです。

進歩主義教育運動によつて設立された進歩主義幼稚園 (Progressive Kindergarten) では、アメリカの保育研究者のパティ・ヒル (一八六八—一九四六年) や、ウィリアム・ヒアド・キルパトリック (一八七一—一九六五年) が、ドイツのフリードリッヒ・フレーベル (一七八二—一八五二年) によつて説かれた「子どもの自発性の尊重」や「遊び論」を踏まえながらも、恩物体系の形式的墨守や子どもの理解を超えた大人の恣意的な象徴主義に傾きがちであった「フレーベル主義」を批判し、フレーベル自身の思想に立ち戻ることを主張しました。

たとえばヒルは、今も世界中の子どもにうたわれる、*Happy Birthday to You* のもと (*Good Morning to You*) をつくり、「ヒルの積み木」と呼ばれる大型積み木を考案し、新教育や進歩主義教育のメッカであるコロンビア大学の附属幼稚園で「コンダクトカリキュラム」(導くカリキュラム) を作成しました。今で

もヒルの積み木は世界各地の保育の場で愛用され、コンダクトカリキュラムの思想は、たとえば、イタリアのレッジョ・エミリアのプロジェクト・アプローチの実践 (つまり今世界中の注目を集める新進気鋭の保育カリキュラム論) に息づいています。私たちが当たり前のものでしている保育 (の思想) をよく見れば、そこここに進歩主義教育の影響が色濃く残っているのではないでしょうか。

### 倉橋惣三の見たアメリカと保育の思想

新教育運動の旗手、ジョン・デューイ (一八五九—一九五二年) が『民主主義と教育』を出版し、キルパトリックが『フレーベルの幼稚園の諸原理の批判的検討』を世に問うた翌年にあたる大正六 (一九一七) 年、倉橋惣三は、お茶大附属幼稚園にあった恩物を「他系列をまぜこぜにして竹籠の中へ入れ」、子どもが自ら遊べる積み木の玩具として配置し直しました。これは、

子どもの生活から出発することで教育を改革する新教育運動の系譜に倉橋の保育思想を位置付ける有名なエピソードです。

ただし、倉橋が文部省在外研究員としてヒルやキルパトリックを訪ね保育を見学した際、彼が新教育（新保育）でさえ「型」になると指摘している点には、改めて注目してみる必要を私は感じています。進歩主義幼稚園を見た後、倉橋はこう言うのです。

「……率直に言えば、どこでも感服したとは言えない。……（中略）時としては、「新保育」の型の中へ幼児がはめこまれているだけなのもあった。もちろんなる程これこそと思ったところもあったが、それは必ずしも「新保育」にとらわれていない田舎の幼稚園などにかえて多かった。そして、そこでは、先生よりも幼児の方が主になって生活させられている……。」

つまり倉橋は、進歩主義幼稚園で試みられていた保育（倉橋いわく「新保育」）よりも、子どもたちが能動的に生き活きとしている場にこそおもしろ味を感じ、「先生のプロゼクトよりも自分たちのプロゼクトで遊んでいる」子どもに目を留めています。倉橋の「誘導保育論」の背景にあつたといわれるアメリカの進歩主義幼稚園やコンダクトカリキュラムは、しかしそのままの形で取り入れられたのではなく、たとえ「新保育の型」であつてもそこへ子どもをはめこむようなことがあつてはいけないという倉橋の保育の思想となつて日本へたどり着いたのではないのでしょうか。

『幼稚園真諦』（倉橋惣三文庫① フレーベル館）の最後ではいみじくも、「（この本は）近頃宣伝される新保育でも、輸入保育でもない」と、倉橋自らが言っています。そう考えると倉橋は、新保育の内容や方法を「型」として輸入したのではなく、新保育運動を駆動する保育の思想を同時代的に実践したものと考えられます。

目の前にいる子どもの生活から保育を改革し続ける新保育の思想を、倉橋は、附属幼稚園で実践したのでしよう。

今も附属幼稚園では、「子どもの生活から」出発する保育がなされ、子どもたちの遊びが豊かに展開しています。それは、子どもの生活の変容をとらえながら、日々の保育を生成しようとする進歩主義教育の流れをくむ保育の思想に通じる実践であり、また「子どもの遊びを守る」という倉橋の決意を受け継いでいる保育であろうと思われまます。

### 津守氏の渡米とその後の保育研究

倉橋がヒルヤキルパトリックを訪ねた一九一九年からおよそ三十年後、一九五一年、敗戦の混乱を乗り越え戦後民主的教育が模索される日本をあとに、今度はお茶の水女子大学（以下、お茶大）から津守眞氏が渡米します。倉橋のように津守氏もまた、アメリカの進

歩主義教育思想に出会っています。留学中、ミネソタ大学の Institute of Child Welfare（子ども福祉研究所）で、彼は進歩主義や新教育の流れをくむ保育思想の変遷を研究し論文にまとめました。ミネソタ大学の附属幼稚園（前号で筆者が来訪した、現在のラボ・スクール）で子どもの遊ぶ姿に励まされながら新教育の思想について考えること一年十か月、津守氏は一九五三年に帰国し、お茶大に復職します。家政学部児童学科の附属幼稚園内にある研究室で、「幼児が一日中遊ぶ姿の中に幼児教育がある」というアメリカでの学びに伴走されながら、お茶大での保育研究が再開されました。

しかし彼の帰国後、アメリカの保育・教育界は転換の時代を迎えます。一九五五年、アメリカの進歩主義教育協会は解散し、「子どもの活動を中断して遊びの実験場面をつくり、教育効果のあがるプログラムを作ろうとする研究が主流」になります。津守氏が、ミネソタ大学の附属幼稚園を二十年後（一九七四年）に再

訪すると、「知的教育のプログラムがなされていて、幼児の活動はこまぎれ」で、「そこに身をおくことに耐えず早々に辞去」するような保育が展開されていた。ところがその十年後の一九八五年、愛育養護学校の保育の実践にすでに忙しくなっていた津守氏が同じ保育の場を訪問すると、「プログラム教育から脱し」、「戸外で水たまりに木の葉を浮べて子どもたちが遊んでいる」保育がなされ、職員室の書棚には「進歩主義教育時代の書物が並んでいた」そうです。アメリカの保育実践が変化していく早さには、驚かされるばかりです。

今回、二〇〇七年にミネソタ大学のラボ・スクールを私が訪問したときには、戸外に「がまくんとかえるくんの流れ」の小川がつくられる、のびやかな保育が実践されていました。ただ、保育の充実が社会的格差は正に向けた国家的使命としてアメリカで叫ばれ始めた今、言語教育などの知的プログラムに多くの時間が

割かれていることもまた明らかでした。進歩主義教育思想とアメリカの保育は、短いアメリカの歴史の中でも、このように多くの紆余曲折を経て今に至っています。津守氏の保育実践・保育研究が、アメリカの進歩主義教育思想の影響を受けながらも、日本の保育や教育の現状に合わせて展開されてきたことの歴史的意味については、改めて考えてみたいと思います。

### アメリカの教育実践の現在から

私の今回の渡米目的は、リベラルな政治風土で知られるミネソタにおいて、現在どのような中等教育段階の市民教育実践 (Public Achievement、いわゆる「シテイズンシップ教育」) が行われているのかを視察することでした (広田照幸代表、科研費基盤研究B海外視察)。訪問したミネソタのアヴァロン高校 (Avalon School) では、カリキュラムを学問体系からではなく市民生活から出発させる学びを大事にする実践が試み



られており、これはもちろん、デューイ以来の進歩主義教育思想の流れに位置付く教育実践です。

そこでは、教師と生徒の対面式の授業はごくわずかで、机を円く囲んだゼミ形式の学び、二三人の生徒が教師らしき人の周りに集まって話しをしている学びなどが主に見られました。生徒の自主性に任されたこうした学びの雰囲気は、子どもが「自ら」であることを大事にする保育の場によく似ていました。

進歩主義教育の流れをくむ保育の思想は、「子どもと一緒に過ごす生活を、それが何に役立つかを問わずに、その現在が子どもにとって楽しいものであってほしい。」



という保育・教育の思想とともに、日本でもアメリカでも、徐々に積み重ねられているように思われます。そう考えていくと、デューイ研究者であ

り、レτζジョ・エミリアアのプロジェクト・アプローチを日本の保育界へといち早く紹介した佐藤学氏が、愛育養護学校の実践に注目することの意味もまた明らかでしょうが、これについては今後の課題にしたいと思います。

(お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師)

## 注

- 1 津守眞「私が幼児教育を志した頃(7)」「幼児の教育」第九十九巻第五号(二〇〇〇年五月)十五頁
- 2 主に岩崎次男「新教育運動における幼児教育思想」青木一ほか編「保育幼児教育体系第5巻 保育の思想」一九八七年、労働旬報社、参照
- 3 倉橋惣三／著 津守眞／編 森上史朗／編「倉橋惣三文庫2 子供讃歌」フレールベル館、二〇〇八年、九十五頁
- 4 同前、九十九頁
- 5 加藤繁美「対話的保育カリキュラム(上)」ひとなる書房、二〇〇七年、一九三～一九四頁
- 6 津守眞「私が幼児教育を志した頃(最終回)」「幼児の教育」第一〇〇巻第十二号(二〇〇一年十二月)
- 7 同前、二十八頁
- 8 津守眞 NHKブックス五二六 『子どもの世界をどうみるか』行為とその意味』日本放送出版協会、一九八七年、一六六頁
- 9 佐藤学／監修、津守眞・岩崎禎子／著者代表『学びとケアで育つ—愛育養護学校の子ども・教師・親』小学館、二〇〇五年

## 編集後記

春3月号、「子どもと春」を特集したが、据わりのよすぎる組み合わせだったかもしれない。人生の春、萌え出ずる内的な力を象徴する季節と「子ども」とは、ほぼ同義である。特集原稿を読むと、「春」は別れと出会いの季節でもあり、子どものその人生の節目を、周囲の大人や保育者は、はらはらと、心を込めて見送り、また迎え受けていることがわかる。

4月から実施される改訂版幼稚園教育要領・保育所保育指針では、幼小・保小の連続性が一層明確に打ち出される。幼児期と学童期の間には季節の変化に似た一線がある。その間が不連続である面の積極的意義を私たちは充分検討しているだろうか。連続性がただ「小1プロブレム」への処方箋として語られる傾向はないか。(H)

## 幼児の教育 第108巻 第3号

平成21年3月1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集部 永山 綾  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社 フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円 (本体524円)  
©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵 ヨシエ  
扉カット ヨシエ  
扉題字 津守 眞  
カット 田崎トシ子  
編集委員 上坂元絵里  
高橋陽子

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

## 次号予告

- ・巻頭言 幼児の「発達」をどう見るか 佐伯 胖
- ・新連載 ツブキ先生の虫のつぶやき(1) 津吹 卓
- ・新コーナー 「ひととき」第1回 松井るり子
- ・『幼児の教育』ネット公開に寄せて(4) 浜口順子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



## ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始まりました！  
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション”TeaPot”  
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。  
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。  
ご意見ご感想などは、youjmail@yahoo.co.jpまでお寄せ下さい。

新

刊

保育に活かせるアンパンマン新シリーズ誕生

手づくりアンパンマンといっしょ③

# エプロンシアター<sup>®</sup>

中谷真弓／著

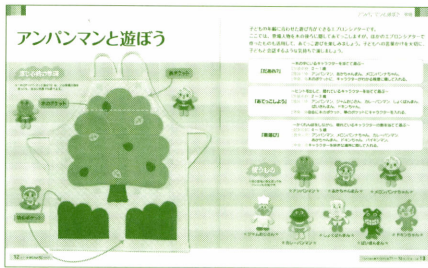
子どもたちに大人気のアンパンマンを手づくり作品で楽しむ実技書の第3弾！

「ジャムおじさんの誕生日」「アンパンマンと遊ぼう」「だあれ?」「あてっこしよう」「数遊び」「みんなでカレーパーティー」「みんなでおかたづけ」など、乳児から幼児まで楽しめる遊びや生活習慣に役立つエプロンシアターを紹介しています。

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)



10903



## わくわく☆おもちゃ かんたん ギフト

好評  
発売中!!



10901

島田明美・尾田芳子・チーム Yamy／著

26×21cm 88ページ 定価 1,995円(税込)



10902

千金美穂・尾田芳子・あかまあきこ／著

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)

キンダーブックの

### フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

「環境保育」  
って何？

「子どもが大切にされ、自然・人・地域・社会と  
しっかりつながって育てられてこそ、  
環境教育の土台ができる」それが、環境保育！

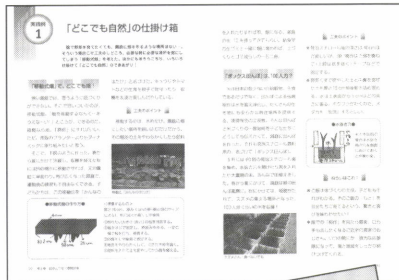
いつでもどこでも  
**環境保育**

—自然・人・未来へつなぐ保育実践—

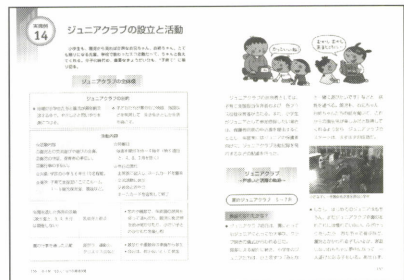
有賀克明 / 編著

乳幼児にかかわる仕事こそ、地球の未来を  
切り拓きます。自然につながり、人・地域・  
社会とつながる保育を通じて、環境教育の  
しっかりとした土台を築き上げる新しい  
保育思想と実践、環境保育の誕生！

21×15cm 224ページ 定価2,100円(税込)



10730



はじめに

**CONTENTS**

第1章 環境保育はいつでもどこでも

第2章 自然とつなぐ環境保育

第3章 人とつなぐ環境保育

第4章 社会とつながる環境保育

第5章 子どものつぶやきに学ぶ環境保育

第6章 座談会 子どもと自然と環境保育  
環境保育実践と明日への希望

おわりに

キンダーブックの

**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円)☆